慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小幡篤次郎の思想像：同時代評価を手がかりに
Sub Title	
Author	住田, 孝太郎(Sumita, Kotaro)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2004
Jtitle	近代日本研究 No.21 (2004.) ,p.33- 88
JaLC DOI	
Abstract	福沢諭吉が慶應義塾を白発的共同結社として創始したことは周知の事実である。そのことは福沢の思想と事業が結社の共同性に裏打ちされていた可能性を示唆している。そうした観点に立つとき、初期慶應義塾において共同性を最も発揮した人物として小幡篤次郎(一八四二ー一九〇五)を挙げることができる。彼こそは初期慶應義塾を白発的共同結社として性格づけるに要をなした人物であり、その思想的活動は福沢の思想をも支えたと言ってよい。小幡を検討することによって初期慶應義塾における共同性がいかなるものだったかを知ることができるだろう。また、そのことによって福沢のテクストの成り立ちについて新しい可能性を示すことできるのである。小幡は福沢諭吉と共に草創期の慶應義塾を担った人物である。では、なぜ彼はこれまで注目されてこなかったのだろうか。それには四つの要因が考えられる。① 作品数が福沢に比べて目立たないこと。② 福沢の作品に関して重要な内容を含むにも関わらず、それらが啓蒙的著述としてのみ受け止められてきたこと。③ 小幡白身が自らを世に顕現することをよしとする人物ではなかったこと。④ そしてなにより彼が洋学を修めた端緒が福沢による勧誘であったことである。これらの事情により彼の活動が福沢の後を追い、福沢を背後から支えるもののように、すなわち彼を福沢の女房役のように後世の人々が受け止めきたきらいがあったことは否定しがたい。このことが彼の活動や著作が同時代に果たした役割の大きさに見合うほどには注目されて来なかったことを招いたといえる。ところが近年になってそのような小幡観に留まらず彼を能動的な主体として捉え、史料に基づいて彼の足跡を辿ろうとする試みが西沢直子氏によって為されてきた。本稿では西沢氏の業績を踏まえつつ、同時代の人々が小幡をどのようにみていたのかについて展望し、彼が遺した作品の再検討を通して私なりの小幡像を提出してみたい。彼の経歴については西沢氏の業績および富田正文氏による略伝を参照されたい。
Notes	特集・ 小幡篤次郎没後百年

Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20040000-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第二十一巻（二〇〇四年）
特集・小幡篤次郎没後百年

小幡篤次郎の思想像

――同時代評価を手がかりに――

住田孝太郎

福沢諭吉が慶應義塾を自発的共同結社として創始したことは周知の事実である。[1]そのことは福沢の思想と事業が結社の共同性に裏打ちされていた可能性を示唆している。そうした観点に立つとき、初期慶應義塾において共同性を最も発揮した人物として小幡篤次郎（一八四二―一九〇五）を挙げることができる。彼こそは初期慶應義塾を自発的共同結社として性格づけるに要をなした人物であり、[2]その思想的活動は福沢の思想をも支えたと言ってよい。小幡を検討することによって初期慶應義塾における共同性がいかなるものだったかを知ることができるだろう。また、そのことによって福沢のテクストの成り立ちについて新しい可能性を示すこともできるのである。

小幡は福沢諭吉と共に草創期の慶應義塾を担った人物である。では、なぜ彼はこれまで注目されてこなかったのだろうか。それには四つの要因が考えられる。①作品数が福沢に比べて目立たないこと。②福沢の作品に関して重要な内容を含むにも関わらず、それらが啓蒙的著述としてのみ受け止められてきたこと。③小幡自身

が自らを世に顕現することをよしとする人物ではなかったこと。④そしてなにより彼が洋学を修めた端緒が福沢による勧誘であったことである。これらの事情により彼の活動が福沢の後を追い、福沢を背後から支えるもののように、すなわち彼を福沢の女房役のように後世の人々が受け止めきたきらいがあったことは否定しがたい。[3] このことが彼の活動や著作が同時代に果たした役割の大きさに見合うほどには注目されて来なかったことを招いたといえる。ところが近年になってそのような小幡観に留まらず彼を能動的な主体として捉え、史料に基づいて彼の足跡を辿ろうとする試みが西沢直子氏によって為されてきた。[4]

本稿では西沢氏の業績を踏まえつつ、同時代の人々が小幡をどのようにみていたのかについて展望し、彼が遺した作品の再検討を通して私なりの小幡像を提出してみたい。彼の経歴については西沢氏の業績および富田正文氏による略伝を参照されたい。[5]

一　小幡篤次郎の同時代評価

小幡は慶應義塾の中で「義塾三尊の一人」と言われたり、[6] 福沢、門野幾之進と共に「三人の偉い先生」[7]と言われてきた。しかしながら「小幡先生も勿論学者ではあつたが、さうして相共に福沢先生を補佐してゆかれた方でありますが、私共の記憶では小幡先生は何れかといふと徳をもつて立たれた人で、門野先生は学をもつて立たれた」（傍点筆者、以下同）という明治二十八年義塾卒業生の懐旧談のように、[8] また没後の『学報』にも「先生（小幡）の清高なる性格と温潤なる情致とは正に文明諸君子の好模範を全社会に与へ、其穏健なる思想と其豊富なる文藻とは常に人を導き世を助けたりき。即ち我日本の社会は先生の死に於いて一徳星を失ひ一燈

明を減じたるなり」とあるように[9]、人格上の評価を彼の特徴としてきたようである。福沢の存在が余りにも巨大だったために、小幡は専ら影の人と目されてきたようである。そのような人物の遺した作品は顧みられる価値のないものなのだろうか。小幡に関する史料は必ずしも十分にまとまっておらず、しかも彼の自記・日記の類が発見されていない（若しくは存在しない）という制約もある。没後百年に当たって、その人物に相応しい評価を見出すために、本稿ではまず同時代人たちの小幡評を手がかりとしてその人物像を描出してみたい。

①『植木枝盛日記』

最初に『植木枝盛日記』を取り上げてみる。周知のように『植木枝盛日記』および『購求書日記』『閲読書日記』は、当時の知識青年がどのように学問的視野を形成したかを示す好史料である。明治八年、植木が二度目の上京生活の中で明六社や三田演説会に足繁く通っていたことを当日記は示している[10]。その中で小幡に関する記述は五箇所である。以下、時代順に挙げる。

※『植木枝盛日記』

・明治八年

六月十九日「七時半頃慶応[ママ]義塾演説会へ往く。（中略）小幡氏学者職分論」

七月三日　「午后六時三田演説会へ行。（中略）小畑[幡]氏自然に任すべからざる論」

九月四日　「夜三田演説会へ行（中略）○人に依りすがつて守りを受ると開化を妨ぐる小幡」

・明治九年

十二月十九日「日陰町に行く、英氏経済論一分二朱を求む。」

・明治十年

一月二十四日「夜槍屋町医学会社、福沢、小幡、江木、井上、矢野等の演説会に過る」

『植木枝盛日記』の中で小幡に関すると思われる記述を拾ってみたが、この日記には事実関係が淡々と記されているものの彼の思考の軌跡は記されていない。松崎欣一氏が指摘しているように、演題が記されていても演説者が記されていることは少ない。三田演説会に関して日記中で記された演説者氏名は小幡と福沢・大石・萩原・細川・猪飼・箕浦の六名のみである。松崎氏は名が表記されている者について、植木がその演説内容に関心を寄せた演説者ということなのか、聴衆に演説者氏名が伝わり難かった事情に因るものか詳らかではないとしつつも前者の可能性を感じさせる書き方をしている。私にもそのように思われる。[11] 淡々と事実関係を記す中で個人名を刻んだということは、植木の中でそれらの名になにがしかの関心が存在したからこそであったに違いないと推察できるからである。

右の引用の補足説明であるが、明治十年一月二十四日の「夜槍屋町医学会社、福沢、小幡、江木、井上、矢野等の演説会に過る」という記述は槍屋町講談会のことであると思われる。松崎氏によれば、槍屋町講談会は江木高遠を軸にした知識人たちが組織した三種類の「講談会」の最初のものであるという。江木高遠、井上良一、矢野文雄らと共に小幡も社員となっていたようである。[12]

同じく植木の『購求書日記』『閲読書日記』にも小幡の著作を見出すことができる。

※『購求書日記』

・明治九年

「一生産道案内　十銭　十月九日」

「一上木自由之論　一冊　四銭　十月下浣」

「一西洋各国銭穀出納表　六銭　十月廿三日」

・明治十年

「一会議弁　一冊　十銭　六月」

「一弥爾氏宗教三論　一冊　三十六銭　十一月」

・明治十一年

「一英氏経済論　七、八、九　三冊　七十五銭　第一月」

「一議事必携　一冊　廿五銭　十一月」

※『閲読書日記』

・明治五年　「一天変地異　全」

・明治六年　「一博物新編補遺　九月廿八日至廿九日」

・明治八年　「一会議弁　一冊　八月一日」「一上木自由之論　一冊　九月二日」

・明治九年　「一英氏経済論　四、五、六　二月上旬ヨリ三月中旬ニ至ル」

「一英氏経済論　一、二、三　六月上旬」
「一生産道案内　二冊　十一月廿日」
「一上木自由之論　一冊　十一月下旬」
・明治十一年　「一議事必携　一冊　十一月下旬」となっている。[13]

以上、小幡の著訳作を『植木枝盛日記』に見出せることから、彼の存在が当時の知識青年に著書を購入させ、読ませるという関心を抱かせていたことが分かるだろう。

また同じく明治初年の頃についての田中正造の回想中にも「尺、中村、福沢、小幡等の翻訳書大に世に行はれんとす」[14]という記述があることからも、この時期において小幡とその著訳作の存在が知識人たちに広く知られていたと考えられる。

②三宅雪嶺『同時代史』

三宅雪嶺『同時代史』にも小幡の名を見出すことができる。交詢社私擬憲法について触れた部分と、彼の貴族院議員勅撰に関するもの、そして彼が没したことの三箇所である。まず、明治十四年の政変に関する部分である。

「福沢は専制政治に快からず、文明国に準じて改革せんことを欲し、而して自ら調査するの暇もなく、学もなく、之を適当の人に委ぬ。（中略）学識に於て小幡篤次郎が重きを成し、中上川彦次郎、荘田平五郎、

阿部泰蔵、馬場辰猪等と会合し、矢野も加はり、憲法案を草し、「私擬憲法」と名づけて一部の人に頒布す」[15]

貴族院議員勅撰については、

「勅撰議員は宮中顧問官三名、元老院議官二十七名、法制局より三名、帝国大学より六名、司法省及び他の官庁より十名、民間より九名にして、民間にて前官吏の肩書なきは小幡篤次郎一人、福沢諭吉の代理としてなり」と記されている。[16]

没事について、

「翌々十六日、小幡篤二（ママ―筆者注、以下同）郎没す。中津藩士、藩校進修館の句読師となり、塾長に進む。元治元年職を辞して江戸に出で、福沢諭吉に就き、英書を学び、福沢の家塾の長を嘱託され、幕府の開成校英学助教に任ぜられ、後に慶應義塾塾長となり、貴族院議員に任ぜらる。読書に於いて福沢に優ると称せられたるも、性温厚、人と争はず、特性を発揮するに至らず」とある。[17]

右の記述で注目すべきは、「学識に於いては小幡が重きを成し」「読書に於いて福沢に優ると称せられ」たという部分であろう。また、雪嶺の記述を一読すると福沢が交詢社私擬憲法草案作成を命じたように思われるが、

実は小幡の主唱で始まったことは矢野文雄の回想にも明らかであり、このことは彼が必ずしも受動的な人間であったとは限らないことの証左のひとつになると思われる。[18]「特性を発揮するに至らず」という雪嶺の小幡評価については、確かに一面を捉えた評言ではあるが特性を発揮しなかったというよりむしろ彼の学識と性情が初期慶應義塾の基盤の確立に大いに貢献したというべきである旨を松崎欣一氏は指摘している。[19]当を得た指摘と思われる。この後の部分で述べるように、そのような小幡の個性が慶應義塾の発展に大きく寄与したと思われるからである。

③馬場辰猪『馬場辰猪自伝』

『馬場辰猪自伝』にも小幡の名を見出すことができる。[20]馬場が江戸に出て、鉄砲洲時代の福沢塾に入門するため初めてそこを訪れた際に「此の私学校の教頭であつた小幡氏に逢つた」という記述がある。そして草創期の乱雑な空気、教え方もまだ確立しない当時の福沢塾での生活を振り返る記述中で「塾頭の小幡篤次郎は辰猪に注目して、地理や物理を彼に教へた。辰猪は小幡氏の此の親切な援助によつて、学業が可なり進歩した」と述べている。これは小幡の教員としての質の高さを示しているものだろう。

④『朝野新聞』

明治二十三年『朝野新聞』に連載されていた人物評において三月五日に小幡が取り上げられている。[21]七六六字の短いものである。導入部で小幡の人格を印象的に紹介している。

「腹中に万巻を貯へて、富めるを矜らず、皮裏に春秋を懐ひて、未だ嘗て之を口にせざる君が如きは、極めて罕なり。之に接すれば、温乎として春日の如く、霞然として春風の如く」

「要するに粗朴なる外皮を以て、霊妙なる徳量を包蔵せり。即ち此処余の最も貴ぶ所なり」

そして当時の知識人と比して小幡の特徴を述べている。当時の学者を「その名を隠れざるを憂ひずして、その名の顕れざるを憂ふるもの、滔々皆是なり。（中略）動もすれば名実不均を致すことを免れざるに、彼の才子者流は、之に反し、乳臭の口を以て明（みだ）りに古今の大家を罵言し、支離滅裂読むに堪へざる文字を並べ」る者と批判し、それらと対照的な人物として高い学識を持ちつつも控え目な小幡を「歎美已む能はず」と評価している。そして「慶應義塾あることを知るもの、必ず小幡篤次郎君あることを知り、福沢翁の名を知るもの、誰か君の名を記せざらん。而して未だ嘗て一著書の以て世に公にせざるは、君が為に深く惜まざるを得ず」と述べている。この時期までに彼は数々の翻訳、時論を世に出しているので、この部分の意味するところは主著というべきオリジナルの著書・理論書というところであろう。そして小幡のような「世に阿らず、威武権勢に屈せず、政事界商業界に全く関係なき者」にして初めて学者の業に従事すべきであると述べて「君其れ之に当れ。謙退過度は吾輩の取らざる所なり」と、彼への激励で終わっている。[22]

⑤鳥谷部春汀『人物月旦』明治三十八年五月

次に、鳥谷部春汀による小幡評がある。[23] 小幡没直後のものである。鳥谷部春汀は明治時代に『人物月旦』という人物評論で名を馳せた人物である。彼は同年に没した田口卯吉、大東義徹と共に「物故の三名士」と題さ

れた中で評されている。分量は九八〇字である。

冒頭で「三田の隠君子小幡篤次郎翁も亦終に過去帳に登録せられたり。慶應義塾といへば、先づ福沢先生を聯想し、福沢先生の名をいへば、又必らず小幡翁を聯想せざるを得ず」と述べている。そして慶應義塾が福沢によって起こり、その学風も福沢によって造られたと述べた後で「然れども内に在りて其の校風を維持し、補養し、且つ進暢せしめたる功の大半は、之れを小幡翁に帰するの至当なるを覚ゆ」と述べている。しかし小幡は福沢のように「人を吸収するの磁石力なく、世を指導するの先見を有せざりし」と評されている。性格については円満具足の域に達した者の一人とされ、そうした彼の性格が福沢に影響するところ大であったことが述べられている。すなわち福沢が往々にして「悪辣手段」を弄しつつも「極めて親切にして慈愛に富み、寛厚にして衆を容るゝ」度量を持ち得たのは「翁（小幡）の平穏なる言動を伝へて、一層大なる感化を義塾の内外へ与へた」故であったとされるのである。そして「小幡翁は酸味を取り去りたる福沢先生にして、福沢先生は小幡翁と相待つて義塾の事業を大成したりと謂はざる可からず」と記されている。

また彼が十三歳にして善く白文を読み下し、弱冠にして旧藩学校進修館の教頭となったことから「学才の凡ならざりしを知るべし」と述べた上で、彼が身を起こしたのは福沢の誘いと英学の教えによるものであり、「翁の運命は半ば福沢先生に依て定められたりといふべし」とされている。続けて「先生（福沢）は翁（小幡）を待つに門下生を以てせずして友人を以てしたりき。（中略）爾来翁と先生とは、異体同心相分つべからざるの関係を相為して、義塾の事業に協力すること四十余年。先生世を去りし後は、義塾に於ける大小の事自ら之を統宰して、更に先生の遺図を恢弘せむことを期したりしが如し」と述べ、彼の没事につき「余は慶應義塾の為に好個の統宰者を失ひたるを惜む」としている。

結びでは「翁は曾て東京学士会院の会員に当選したりと雖も、翁は学者として成功したる人にあらず。又会社銀行の重役たりしと雖も、翁の本領は実業家たるに在らず。翁は明治の教育家なり。而も智育に於ける教育家に非ずして、寧ろ徳育に於ける教育家たるに近かし」と評して「故に其の人物の重望ありしに拘らず、其の生涯は赫々たる光輝を有せざりき。是れ翁の翁たる所以歟」とされている。

⑥津田権平編『新聞投書家列伝』明治十四年六月

津田権平編『新聞投書家列伝』にも小幡は取り上げられている。津田については未詳である。[24] 小幡評の中で最も長いもので約九ページ、二二七八文字である。要点は、彼が福沢より学識（特に漢籍）に優れ、それが福沢の思想家としての成功・慶應義塾の発展に大きく寄与したこと、初期慶應義塾は彼と福沢の二人の協力によってなったものであり、小幡の協力なしではあり得なかったことである。

冒頭で「五車七科ノ書ハ脳漿裡ニ横逸」「君幼ニシテ漢籍ニ耽リ四書六経諸子百家ノ学ヲ切磋琢磨スルニ怠タラズ」と、その学識の高さが示されている。そして彼が福沢と共に子弟を集めて英書を教授し、その傍ら「西哲ノ諸書」の翻訳を始めて「文明ノ種子ヲ我国人ノ眼裡ニ蒔キ人文ノ理茲ニ漸ヤク萌芽」を出さしめたとされている。

この小幡評で特に重要と思われるのは以下の部分である。

「福沢君ガ茲ニ慶應義塾ヲ設クルモ皆是レ小幡君ガ相助クル所ノモノアルニヨリ終ニ其盛力ヲ得ルニ至レリ。其西書ヲ翻訳スルヤ必ラズ小幡君ノ校正雌黄ヲ経ルニアラザレバ決シテ上梓スルノコトヲナサズト。

是レ蓋シ学力ノ福沢君ニ出ヅルコト一等ヲ加フルガ故ナリト。其文章ノ如キ原ト漢籍ノ資アルガ故ニ福沢君モ常ニ一歩ヲ君ニ譲レリト云ヘリ」

この部分から、少なくとも福沢の執筆活動の初期における翻訳作品については福沢と小幡の共同作業によるものだった可能性があることが分かるだろう。右記のように小幡の学識の高さを指摘した後で、津田は以下のようにも述べていた。

「然レドモ惜ムベシ其才幹ノ一点ニ至ツテハ迚モ福沢君ト并ヒ馳スルコトアタハザルガ故ニ進退左右ノ指揮ヲ受ケザルヲ得ズ。是レ則チ福沢君ガ名声ノ天下ニ伝播シ世ニ先生ヲ以テ知ラレタルナリ。夫レ人此二君ガ事業ノ上ニ就テモ尚ホ能ク才幹ノ尊キ学識ノ上ニ出ツルコト之ニ徴シテ見ルベキナリ。」

これは福沢の才幹の高さ（＝能力をうまく用いる力）を評価し、それに関しては小幡が彼に圧倒的に及ばなかったことを示しているといえるだろう。[25] しかし、裏返せばそれだけ小幡の学識の高さを評価したものともいえる。また彼が慶應義塾を終生の場としたこと自体、自覚的な選択の積み重ねともいえることも付言しておこう。津田によれば初期慶應義塾の発展は福沢の才幹と小幡の学識によって高められたと言えそうである。

また小幡の人格に対する津田の評価は非常に高い。「君幼ニシテ漢籍ニ耽リ四書六経諸子百家ノ学ヲ切磋琢磨スルニ怠タラズ。学業益々進ムニ至リ愈々謙譲辞譲ニシテ眼一丁字ヲ知ラザルモノヽ如シト。且ツ父母ニ従ヘテ最モ孝養ニ厚ク友ニ交ツテ能ク情誼ヲ竭シ当時郷人ノ模範トシテ君ヲ思慕セザルモノナシト云ヘリ」と、

彼が儒学に深く学んで人格を形成したこと[26]、慶應義塾に在って彼が「西洋万巻ノ書ヲ腹中ニ蓄ヘ今ハ便々トシテ既ニ充満スルニヨリ他ニ望ミ求ムルノモノヲ欲セズ。無欲ニシテ只其分限ヲ知レリト云フテ世人ト競争シ社会ノ風上ニ立テ其芳臭ヲ争フノ念ナク三田ノ高台ニ棲居シ袖浦ニ浮ブ月影ノ清キヲ秋ノ長夜ニ之ヲ望ミ以テ人生無上ノ快楽トナス」という生き方をしていたことを述べている。この津田の小幡像からは求道者的な学者像をみてとることができるだろう。

そして、津田は慶應義塾がウェーランド講述記念日としている明治元年五月十五日にウェーランドの講義をしていたのは福沢ではなく小幡だったと指摘する人も居ることを挙げている。両者のいずれが事実であったかは判らないと述べつつも「君ノ如キ人ニシテ沈勇ナラザルモノハアラジ。此故ニ或電光石火ノ中ニ書ヲ講シテ毫モ気色ヲ変セザルガ如キハ最モ君ノ如キ人ニアラザレバ誰ガ泰然トシテ動カザルモノアランヤ」と記している。上野の戦争の日においてウェーランドを講述していたのが福沢だったという周知の出来事への反証としてこの部分に意味があると言いたいのではない。重要なことは、福沢が演じた役割を小幡が演じていたとしても不思議ではないという事実、学識・学ぶ姿勢において福沢が彼に一目置いていた側面があったということを津田が当然の事として受け容れていたということである。学塾として象徴的なこの逸話で福沢に代えるに小幡を以てしても自然なほどに彼がリーダーシップを有していたことを読み取ることができるだろう[27]。このように津田が一般に流布する福沢像（慶應義塾の功績を福沢一人に帰すこと）に立たず、かつ福沢に代えるに小幡を以てしていることは、初期慶應義塾のリーダーシップが福沢の学識・才幹のみならず彼を超える学識を有し、学者として求道者的だったと思われる小幡によっても発揮されていた可能性を窺わせる事実だといえよう。

引き続き津田による小幡評についてみてみよう。当時にあって中等以上の地位に立って社会をリードする者

の多くは慶應義塾出身者であり、特に新聞記者・演説者の多くが慶應出身者であることは「実ニ君等ガ天下ノ人才ヲ陶冶シ一国ノ人智ヲ開発セシ等ノコトタル其ノ功モ亦タ重且大」であると津田は述べて、明治初期における慶應義塾の功績を福沢と小幡の二者に帰している。そして最後をこのように結んでいる。

「福沢君ガ大名ヲ天下ニ博シ得タルモノハ蓋シ一大事業ヲ傑出セシモノアルニヨツテ然ルニアラズ。只其大名ヲ世上ニ博シタルモノハ彼ノ西籍翻訳ノ事ニ因テ之ヲ得タルナリ。而シテ其翻訳ノ事タル小幡君ノ如キ漢洋西籍ヲ渉猟セシ人ヲ得ルニアラザレバ恐ラクハ三田大先生ノ名ヲ今日ニ全フスルコトヲ得サルベシ（中略）実ニ此二君ガ我国ノ文明ヲ助ケシノ功寔トニ多シ」

これをみれば津田が初期慶應義塾の功績を福沢のみに帰していないことは明白であろう。

⑦大庭柯公「人物分布観」

『大阪毎日新聞』紙上で連載された大庭柯公の「人物分布観」にも小幡の名前を見出すことができる。柯公は国家主義者から社会主義者に転じ、最後はロシアに渡って没した人物。大阪毎日新聞、東京日々新聞、外交時報、東京朝日、読売等、多くの新聞社に身を置いた。「人物分布観」は大阪毎日時代に連載されたものである。彼の小幡に関する記述は左記のようなものである。[28]

「蓋し慶應義塾が今日の重を為せるは一福翁の力に非ず、福翁が其一代の名声を博せる所以のもの亦一福

翁の力に非ず、彼の背後には小幡篤次郎あり。学徳一世に秀でたる小幡は福翁と別趣味の人なり。而して大俗にして大平凡なる一諭吉が福翁として名声を天下に致したるは別趣味に富める小幡を抱擁したるに因るもの少からず」

「若しそれ三田翁をして重からしめ、義塾をして現実主義以外多少の或者を存せしめたりし篤学にして謙譲なる小幡篤次郎に至りては、南豊士人の二系統雅俗の外に超然たる一流の高士たり」

彼が福沢と「別趣味の人物だった」もしくは「現実主義者ではなかった」というのは、どのようなことなのだろうか。それについては第三節の最後で後述する。

⑧大分県西国東郡交詢会　植木松二郎演説「開会の主意」　明治十六年二月

最後に地元大分の人物が演説会において小幡を紹介したものをみてみよう。明治十六年二月に彼は中津市学校の閉鎖事務の件と併せて交詢社の巡回員として故郷大分に出張している。その時、豊後西国東郡高田という処で学術演説会・懇親会に出席した。当時交詢社では会員の三分の二を占める地方社員が地域毎に交詢会を形成し、大分でも大分県西国東郡交詢会が形成されていた[29]。ここで取り上げるのはその幹事を務めていた植木松二郎が演説会において小幡を紹介するときに述べた「開会の主意」である[30]。

冒頭で植木は「抑モ諸君ハ今回ノ客員小幡君ノ名声ハ夙ニ聞キ居ラル、ナルヘシ」と述べ、彼が「我国明治維新人民未タ開ケサルノ時ヨリ大ニ見ル所アリテ彼ノ有名ナル福沢君ト共ニ学術ヲ研磨シ西洋諸国ニ遊歴シ彼

ノ文明開化ヲ巡覧シテ帰国ノ後ハ専ラ我国ノ文明開化ヲ誘導進歩セシメンカ為メ東京ノ三田ニ於テ慶應義塾ナル学校ヲ設ケ」たことを述べている。そして、日本が「維新後僅ニ十年計リニシテ今ノ開化ノ域ニ進歩」したのは「其慶應義塾ノ設立ヨリ得タル結果」であると述べている。慶應義塾は小幡が開塾以来十余年の間「恰モ一日ノ如ク」始終福沢を助けて「維持シ盛大ニ致サシメタ」ものであり「嗚呼福沢君ノ名声ヲナサシメタルモノハ小幡君ニシテ福沢君カ我国ノ開化ヲ誘導シタルノ功モ亦小幡君カ成サシメタルモノト謂フモ蓋シ溢美ニアラサルベシ」と述べている。この植木の小幡への高評価には彼が小幡の地元の人物であること、小幡自身を迎えての集まりでの演説だったこと、そして彼が中津藩の上士の家系出身者だったことも考慮に入れる必要があろう。[31] しかし、それでもなお同時代の人々の目に彼がどのように映っていたかを窺うにたるものと思える。なぜならば、福沢や慶應義塾の名声が小幡抜きにはあり得なかったことの指摘がこれまで紹介してきた小幡評と共通しているからである。とりわけ「我国の文明開化」を誘導進歩せしめた人物として、また福沢とは独立した一知識人として小幡を捉えているようにも受け取れるような語り方がされている点は注目に値しよう。

以上、本節では小幡が生きた同時代人たちの評価を紹介してきた。これらから分かることを挙げてみよう。

① 慶應義塾の中の一教員というよりは和漢洋の高い学識に基づきながら、明治初年の時代をリードした知識人として同時代の人々に広く認識されていた人物だったこと。

② 福沢の女房役というよりは草創期の慶應義塾を福沢と共同して導いた人物だったこと。その共同のあり方は、高い学識・人徳に基礎づけられた求道者的な学者という福沢とは異なる資質によってリーダーシップを発揮していたというものだったこと。

③ 彼の学者として求道者的な生き方が、同時代の人の眼には物足らなく映ったり、特性を発揮できなかった人物、もしくは受動的な人物のように受け止められた要因にもなったであろうこと。

こうした小幡と福沢の両者が各々の資質の特長をうまくかみあわせてリーダーシップを発揮したことが自発的共同結社として初期慶應義塾を性格づけ、その発展を導いたように思われる。この点については第三節で再び触れるとして、次節では小幡がどのような著作を遺したのかみてみよう。

二　小幡篤次郎の著訳作とその性格

前節では小幡の人物像を同時代人たちの評価を通して概観し、彼が福沢をも凌ぐほどの学識を有していたという認識が彼らに存在していたことを紹介した。本節ではそうした同時代人たちが目にしたであろう彼の著訳作をみてみよう。

小幡が遺した著作を知るには『富田正文氏旧蔵書籍目録』・三橋猛雄編『明治前期思想史文献』および丸山信編『福沢諭吉門下』を参照するのが有効である[32]。別掲の著作目録もこれらによっている。しかし、これらに記載されている小幡の著作が彼の遺した全ての文献を網羅している訳ではないことに留意すべきである。例えば著作目録に記載してある『郵便報知新聞』紙上での論説をこれらに見出すことはできない[33]。

まず、『郵便報知新聞』紙上に記載された論説について若干の説明をしておこう。それらには彼の主要著作を転載したものや、後に主要著作になったものの一部が含まれている。前者は「上木自由之論」、後者は「弥児氏宗教三論」である。前者は明治六年に単行本として出版されていたものを転載したものであるし、後者は

明治十年に単行本としてその第一篇、十一年に第二篇が刊行された。『郵便報知新聞』に掲載された「宗教三論」は、明治八年に三田演説会で小幡がミルの宗教三論について演説した記録が前述の『植木枝盛日記』にあるのでそれを転載したものと思われる。[34] 彼はミルの『宗教三論』を全訳したが、刊行されて世に出たのはその第二編までである。[35]

さて、小幡の著作を概観するとその内容が百科全書家的であることが判る。[36] 博物学・究理学から政治、経済に関する翻訳・著作まである。[37] 特徴としては翻訳が多く、オリジナルの著作物は『郵便報知新聞』『民間雑誌』や『交詢雑誌』上での論説が多い。その中で主著というべきものを挙げるならば『英氏経済論』『弥児氏宗教三論』であろう。『英氏経済論』は Francis Wayland, *The Elements of Political Economy*, 1837. の全訳で、この原書が福沢の思想形成において果たした重要性は周知の事実である。[38]『宗教三論』は John Stuart Mill, *Three Essays on Religion*, 1874. の翻訳である。両書共に福沢の思想と深く関連すると思われるものである。[39] この二書を小幡の主著とみなす理由は、両書の分量が彼の遺した文献の中でも圧倒的に多く、それらに向けた情熱も多かったろうこと、それらが福沢の思想と密接に関連しており明治初期における近代日本の思想形成に影響するところ大だったであろうと思われることである。

次に、彼の著作の特徴として政治・経済に関する時論が多いことが挙げられよう。以下ではその主なものを取り上げてみよう。ここでは時論という性格に位置付けられるもの、中でも彼のオリジナル論説に限定して紹介する。そうしたものの嚆矢は明治七年二月の『民間雑誌』第一編「農ニ告ルノ文」である。これはそれまでに発表されていた『学問のすゝめ』第四編までの概略のようなものである。農民が「日本人民」として自覚を持ち、政府の所業の良否についての判断力を養成するために、彼らが「智恵ヲ磨」くことが必要であると主張

している。次に明治八年二月に『民間雑誌』第八編で発表された「内地旅行ノ駁議」がある。この論説は西周が『明六雑誌』第二三号上に記載した演説筆記「内地旅行」において外国人の内地往来を積極的に容認しようとしたことへの駁論である。またこの論説は、福沢の『文明論之概略』第十章に引用もされており、福沢の思想との関連も特に深いものである。『郵便報知新聞』上の各論説はまさに時論的なものでここに容易にまとめることを為し得ない。

明治八年五月の『民間雑誌』第十一編「嫡子ニ限リ家督相続ヲ為スノ弊ヲ論ス」には、明治初年における家族制度を論じたものという家永氏の記述や西沢氏の研究がある。[40]

この論説については、西沢氏が「トクヴィルの言説を引き」という指摘をされているのみであり、[41] 具体的にトクヴィルの何処の議論を踏まえたものであったのかについては、これまで言及されてこなかった。しかしながら、この論説で小幡は恐らくトクヴィルの『アメリカの民主主義』第一巻第三章「イギリス系アメリカ人の社会状態」を下敷きにして議論を展開している。彼が冒頭で「所謂デプレイブド テイスト フオア イクアルテイ（平均ヲ求ルノ卑屈心）」と記した部分は、トクヴィル第三章第二節の「人間の心には堕落した平等嗜好も存在する」という記述中の「depraved taste for equality」という部分と全く同じである。[42] そしてトクヴィルがその章においてアングロ・アメリカンの平等社会を決定づけたものが、兄弟（姉妹）間の平等的分配の「均分相続法」であったことを述べていた点に注目するとき、小幡がこの論説に込めた意図をより正確に推察できるように思われるのである。すなわち、この論説における彼の問題関心は必ずしも家族制度という範疇に収まるものではなく、根源的に人が平等であるということはどういうことであるのか、またいかなる条件下で平等になり得るのかというものだったように思われる。なぜならば彼はこの論説の冒頭で、方今の論者が「華士族の素餐」を責

めることについて、それは確かに人間同等の水準を得ようとする真情のようではあるが、実は「平均ヲ求ルノ卑屈心」であり、「決シテ悉皆ノ人間ヲシテ有力貴重ノ人タラシメント欲スルノ人間同等ニアラズ。何以テ之ヲ証セン」と、人間が同等であることについてトクヴィルから得た知見を基にしつつ彼なりの定義を述べた上で論を立てているからである。この論説での彼の基本的関心は人間が同等・平等であることの意味を探求することにあり、それ故トクヴィルの上記の部分を参考にしてこの論説を書いたのではなかったか。[43] だからこそ最後に「此法（均分相続法－筆者注）一度設立セバ、華士族モ毀ツ可シ、男女同権モ行ハル可シ、民権モ復ス可シ、道徳モ興ル可シ、敢為ノ風モ希フ可ク、財貨ノ分賦モ其平ニ赴ク可シ」と、均分相続法の家族制度を越えた波及効果への期待をも述べたように思われるのである。但し、そこにはトクヴィルが文中で匂わせているような平等化の進んだ状態に対するペシミズムは反映されていない。そこに明治初年におけるトクヴィル受容の在り方の一端を窺うこともできるように思われる。[44]

小幡の著作紹介に戻ろう。彼の論説で発表回数としても内容的にも充実していたのが『交詢雑誌』に掲載された論説および演説筆記である。それには恐らく理由があったように思われるがこの点については第三節で後述する。「各国憲法提要」はベルギー・デンマーク・フランスなどヨーロッパ各国の憲法を祖述したもので複数回にわたって掲載された。これらは丸山信『福沢諭吉門下』では小幡の手によるものとされているが、現本では記名はなく実際に彼の手によるものかどうか定かではない点があることを指摘しておく。「埼玉談話会ノ創立ヲ祝シ併テ中等社会ノ隆盛ヲ冀望ス」は、バックルが英国史においてミドルクラスの果たした役割について述べた部分を引用しながら日本の歴史的文脈に応用して、農工商層の知識層こそがこれからの日本をリードしてゆく存在であることを主張したものである。[45] この論説以降の『交詢雑誌』上の論説の中で「致富論」「鉄

道論」「物産論」「農工商ノ未来ヲ論ズ」「日本国ノ地位ヲ論ズ」「欧州ニ航路ヲ開クベキノ案」といった経済的な論説がひとつの軸として注目される。その内容の概略はいずれも合理的な経済主体の形成と市場社会の基盤整備を説いたものである。

また小幡の著作が初等教育においてかなりの役割を果たしたことも指摘しておくべきだろう。『天変地異』や『博物新編補遺』といった究理学の初等テキストに加えて、日本史の初等テキストも出している。『小学歴史階梯』（明治十九年）、『小学歴史』（明治二十四年）の二冊である。これらは当時の歴史教科書の中でも通史を上・中・近世に分けて国の歴史を編纂するという新しい意図によるものだったとされている。[46]

最後に大同団結運動と小幡の関わりについて触れておこう。後藤象二郎が提唱した大同団結の機関として、明治二十一年六月一日に雑誌『政論』が発行された。記者は大石正巳、菅了法、滝本誠一、安岡雄吉、甲藤大器、西直資らだった。この『政論』創刊号の巻頭に小幡は「政論ノ発行ヲ祝ス」と題して祝詞を寄せていた。[47] 彼は『政論』の発行を「已ムヲ得ザルニ出ルモノ」としつつ、「政論ノ標準トスル所ハ最多数人民ノ最大幸福」にあるのか「少数門閥ノ専制圧抑」にあるのかと問うている。更に各国の歴史をみれば知者が少なく愚人が多いことから、最多数人民の幸福を目指すことが衆愚に陥る危険を示唆して、それが真に良いものであるのかと問うている。そして「少数門閥ノ専制圧抑」も歴史を見れば「国歩ノ艱難ヲ濟（スク）ヒ社会ノ秩序ヲ保チ人民ノ開化」を助けてきた例も多いと言う。君民同治のドイツも実は専制抑圧政体であり、共和政治のフランスをみても少数知者の支配であると言っている。よって政治体制論のいずれかに従って「国家永遠ノ福利」を謀るべきかを知ることはできないと彼は言う。そして結局政治体制の良し悪しを知ることができないならば、人々には「唯政論ノ多キニ苦ミテ岐路ニ彷徨スルノ嘆」があるのみだと述べている。小幡はここで西洋の政治理論のどれか

に依って立つというよりも、それらを基にしていかに「国家永遠ノ福利」を謀るべきかについて考えているように思われる。その意味で、少なくともこの時期において彼が西洋政治理論の単なる紹介者に留まる人物ではなかったことが分かるだろう。そして「国家永遠ノ福利」を考える際に彼が「政論ノ多キニ苦」む人民にスタンスを置いていたことが分かるだろう。

この祝詞の後半部分における問題意識は二点あると思われる。ひとつは喧しかった当時の政治に関する言論状況への批判であり、そうした諸説入り乱れる言論状況下では人民はどのような政治体制が良いのか判断できなくなるというものである。もうひとつの問題意識は矢継ぎ早に新しい法令を繰り出す当時の政府に向けられたもので、秦が繁文によって人心を失い、代わって漢の高祖が三章の法を設けて規則を簡素にしたことを例示しながら説明している。繁文そのものを批判すると共に、それが人々の政治熱を煽っていることも指摘している。どちらの問題意識も人々が政治に熱中し過ぎること、また繁文を厭うようになることが明治政府を揺るがすことに繋がることを危惧したものといえる。そして『政論』は後藤が提唱したもので、彼は「発乱反正（乱れた世を治めて、正しい状態に戻すの意）ノ元勲」であり、『政論』は人々が「政事政論ノ繁数喧囂」に苦しみ、それらを倦厭することを解消することを企図して発行されるものだという。結びは以下のようになっている。

「後藤伯ハ発乱反正ノ功臣ナリ。即チ破壊ノ将帥ナリ。破壊ノ旗色能ク此繁文褥礼ノ濃陣ヲ破リ喧囂不整ノ論軍ヲ駆リ以テ人世ノ苦悩ヲ除キ快活円満ノ幸福ヲ与フルナラン歟世人ノ企テ、希望スル所ナリ。世人ガ伯及諸氏ニ望ム所ハ火上ニ薪ヲ加フルニ在ラズシテ其慣熟ノ破壊手ヲ用ヒ火上ニ水ヲ注グノ一事アルノ

ミ。又云ク伯ハ佐命ノ元勲ナリ。之ヲ補佐スルノ諸氏モ須ラク持重引満シテ自カラ身ヲ軽スルコト勿レ」

このような議論は、官民宥和路線と指摘される時期の福沢の言説に則ったものに思われる。そして大同団結運動におけるこの時期は、旧自由党系の人物達が保安条例によって東京を離れていた時期であり、小幡の祝詞は大同団結運動の主導権を改進党系に回復させようとしたものにも読める。[48] 福沢と後藤の関係については既に言及されてきたが、大同団結と福沢・慶應義塾との関連については必ずしも言及されてこなかったように思われる。[49] その意味でこの祝詞はそれら相互の関連を示唆しているように思われるのである。

三　小幡の人物像および思想像をめぐる試論

小幡の同時代評価とその著作について展望してきたが、最後に私なりの小幡像をまとめて考察してみたい。第一節での彼の同時代評価においては、慶應義塾の一教員に留まらない小幡像を提出した。しかし、それはあくまでも他者の視点からのものであって、小幡自身がなにをいかに考えて行動したかを直接的に示すものではない。本節ではできるだけ彼自身に近い史料からその実像を探ってみたい。

①小幡の能動性について

これまで述べてきたように小幡は「福沢の女房役」という従来の評価に留まる人物ではなかったと思われる。本節では、従来の小幡評価ではあまり顧みられることのなかった彼の能動的な部分に注目してみたい。

左に引用するのは、明治二十一年に福沢の二人の子息が米国留学から帰国した時の宴で小幡が述べた祝辞であり、その後『交詢雑誌』に掲載されたものである。[50] その祝辞の前半部分で彼は自分の半生を次のように回想していた。

「二十五年前の昔日を回顧すれバ殆と茫乎として忘れたるが如く又実に忘るゝ所多し。当時は余も尚ほ壮年にして客気多く種々の思想を馳せ漫に空中の樓閣を画きたりき。或ハ同窓相集て泰西文物の壮大を欣慕し、攘夷鎖港の固陋を嘆し、一日千秋の思を為して文明の東遷を希望したりしが、二三年を出ずして文明東遷の好機会に際会し文明の巨力、向ふ所、物として摧破せざるなく事として更新せざるなきの大活劇を目撃するの幸を得たり。教育の普及を希ヘバ教育全国に普及し、政治法律の改良を欲すれバ政治法律爰に改良し、海陸軍の拡張を冀ヘバ海陸軍の拡張を目撃し、衣食住の更新を求むれバ衣食住の更新を来し、精神を鼓舞せられ耳目を快爽せらるゝこと殆と枚挙に遑あらす」

この回想は明治初年に啓蒙思想家・活動家として幅広く活躍した人物のものと言ってよいだろう。そのことを裏付けるように、彼は慶應義塾の一員としてだけではなく、東京師範学校に附設された中学師範科の創立に教頭兼幹事として関与していたし、杉亨二らと政表社を組織してそれが後に統計学協会となるなど様々な活動をしていた。[51] これらのことを考えれば、彼が慶應義塾の一教員という以上に能動的に時代そのものに関わった人物だったと考えて差し支えないだろう。そして小幡の能動性は、慶應義塾と結びつきの深い交詢社にも見てとれるのである。前節でも述べた通り、彼独自の論説の多くは交詢社発行の『交詢雑誌』上で発表されたもの

だった。それは彼と交詢社に深い結びつきが存在していたためと思われる。交詢社の設立過程を史料に即して辿ってみよう。

『交詢社百年史』序の冒頭でも引用されている設立一年前（明治十二年）の福沢書簡に「先日より小幡（篤次郎－筆者注）、小泉（信吉－筆者注）其他、新旧社中三十名斗り之発起ニ、知識交換、世務諮詢と申趣意を以て一社を結ひ、社則等も略整ひ候」とある。[52] これによれば、交詢社は小幡を始めとする複数の慶應義塾塾生による発起のようにも思われる。しかし、この書簡を二ヶ月ほど遡った福沢書簡には「義塾の同社は小幡君の発意にて同窓会の事を企、昨今略緒に就たり」と記されており、『福沢諭吉書簡集』の該当部分の注では「「同窓会の事」はのちの交詢社の設立計画のことか」とされているのである。[53] 更に重要と思われるのは小幡自身の言葉である。彼は明治十四年二月に交詢社設立一周年を祝う席で演説をした。それは「交詢社第一紀年会報告」として『交詢雑誌』三七号に筆記されたが、その中で彼は、「本社結合ノ端緒ヲ世ニ告知セシハ実ニ一昨十二年ノ十一月ニ在リ。爾来僅ニ三数月ニシテ一千八百余名ノ同意賛成ヲ得テ此社ヲ創起シタレハ一度ハ余輩ノ企図モ幸ニ世ノ縉紳先生ノ賛成ヲ得テ此盛大ヲ致スヲ（以下略）」と述べていた。[54] ここに交詢社を企画した小幡の自負がよく現れているように思われるのである。更には交詢社の名前の由来について『朝吹英二君伝』中に「名前は小幡先生の提案で、「智識を交換し、世務を諮詢す」の文句から、交詢社と命名され（以下略）」という記述も見られる。[55] 門野幾之進の回想でも「交詢社創立といふのは矢張り小幡さんといふやうな人が主ですネ」とある。[56]

これらの史料と彼が設立時から十八年の長きにわたって交詢社職員の長たる幹事だったこと、また彼がオリジナルの論説の多くを『交詢雑誌』上で発表していたことなどを併せて考えれば、彼を集団的な発起人の一人

と解するよりも交詢社設立そのものが彼自身の強い意図に基づくものだったと解してよいように思われるのである。

また小幡が思想的立場においても必ずしも福沢の女房役、若しくは受動的な存在に留まる人物ではなかったことも交詢社における演説から窺える。先に交詢社の一周年を祝う小幡演説を引用したが、同じ日に福沢も同旨の演説をしていた。しかし両者の演説を比較すると、二人の間で交詢社像が微妙に異なっていることが窺えるのである。福沢の演説では交詢社はあくまでも社交団体であって、政治について談じることは「軽挙匆卒ニ陥ランコトヲ恐ル故ニ之ヲ社則ニ禁シテ」と言われて「政ヲ談スルニ時アリ處アリ又法アリ」と言われていたのに対して、小幡の演説では我が国には「結社ノ本源タル政党」が存在しないと嘆きつつ交詢社が今日のように盛況ならば「政党ヲ出スモ亦遠キニ非サル可シ」と述べられていた。但し小幡が「結社協同の事」が必要と考えていたのは、当時の日本に昔のような種族の結合・宗教の結合・将卒の結合が存在しない状況を鑑みてであって、彼が重視したのは人々の「結合」「団結」という「人心の繋がり若しくは人心のまとまり」だったと思われる[57]。その意味で、彼が政党に期待していたものは政党を手段とする直接的な権力追求、政権奪取行為というものではなく、種族の結合や宗教の結合といった国民的な紐帯の形成、ナショナリティの構築であったと思われる。そのことは当該演説の左記の部分に明らかである。

「本邦目下ノ形状中ニ結社協同ノ難事タルハ諸君ノ躬自カラ試テ知ル所ナラン。何トナルニ之ヲ歴史ニ徴シ之ヲ事実ニ求ルニ上世ニ在テ結合ノ最モ固キハ種族ノ結合ナリ宗教ノ結合ナリ将卒ノ結合ナリ。此結合ハ今世ニ至ルマテ多少ノ変遷ヲ受ケ勢力大ニ減縮シ文明諸邦ニ在テハ微々僅ニ存スト云テ可ナルガ如キモ

ノアリ。中世以后固[57]結ノ最モ強盛ナルハ政党ノ団結ニシテ此団結ハ国ノ文明一歩ヲ進レハ愈其労力ヲ増益シ国民ヲ挙テ或ハ甲党或ハ乙党其孰レニカ居ラサレハ以テ世ニ立ツ能ハサルノ勢ヲ成シ政党外ニ人ナシト云フ可キノ形状トナレリ。斯ル大団結大勢力ノ結立アルヲ以テ人間万事皆結社ニ非サレハ勢力ノ乏キヲ覚ヘ習ヒ性ト為テ大ハ政党ヨリ小ハ民間ノ鎖事ニ至ルマテ皆団結協同セザルナキニ至レドモ本邦ニ在テハ尚結社ノ本源タル政党ナク種族宗教将卒ノ結合ハ既ニ已ニ衰運ニ属スルヲ以テ結社協同ノ為メニハ最モ障害多キ時代ト云ハザル可ラス」

小幡はこのような結社観を何処から得たのか述べていないが、恐らくトクヴィルの『アメリカの民主主義』で得た知見を応用したのではないかと思われる。このような政党理解がどれだけ近代的な意味での政党理解であるかは疑問の余地も存するだろう。いずれにせよ、彼は権力の追求手段として政党を語った訳ではない。その意味で彼の政党観は政党に対して慎重だった福沢と同じもののようにも見える可能性はあるが、実は異なる政党観に基づいていたようにも思われる。福沢が恐らくパーシャルなものとして政党を自身の関係する事業（慶應義塾・時事新報社・交詢社）と一貫して区別したことと[58]、小幡が交詢社において国民的な団結の必要性から政党への期待を明確に表明したことの間には政党観に関する両者の相違があったように思われるのである。また、聴衆の中には「結社ノ本源タル政党」の不在を嘆じ、「政党ヲ出スモ亦遠キニ非サル可シ」と述べたこの小幡の演説を所謂権力追求型の政党待望論と受け取った者がいたとしても不思議はないだろう。その場合、福沢の演説とは非常に対照的なものと聞こえたはずである。こうしたことを小幡が自覚していたかどうかを知る手がかりはないが、明治七年の三田演説会発会以来、多くの弁論を為した彼が己の弁舌の受け取られ方につ

いて無自覚であったようには思われない。[59] その意味でも小幡の能動性をみてとることは可能だろう。しかし、小幡と福沢の微妙な差異を解釈する際に、彼が福沢の意図に忠実たろうとしつつも多少取り違えて演説していたという可能性もあり得るだろう。この可能性を全く拭い去ることはできないことも付言しておこう。

以上、小幡が交詢社を自ら企画したとみなし、そこでの演説からも福沢の交詢社に関する意図の範疇を超えたものだった可能性も見出せるという点から、彼の能動性を探ってきた。このようにみれば、彼が能動的に時代そのものに関わった人間だったとみなしてよいと思われる。

本節でみたように小幡と福沢の交詢社観、結社観に微妙な差異を見出すことができるものの、彼の思想について知ることの重要性は、福沢との差異というよりはむしろ両者の思想がどのように関連しているかという部分にあるように思われる。この関連性が明らかになれば、福沢の思想を解明するにあたって小幡の著作を理解することの意義が明らかになるだろう。

②小幡と福沢の思想的連関について

まず福沢『文明論之概略』第十章に引用された小幡の「内地旅行ノ駁議」（『民間雑誌』第八編、明治八年）について、平石直昭氏はこの論説が福沢のモラルタイの議論に示唆を与えた可能性の高いことを指摘している。[60] すなわち、それまで封建的名分論を痛烈に批判していた福沢だったが、『文明論之概略』第十章においては日本の独立の維持の緊急的な必要性を自覚したことから伝統的なモラルタイ（「君臣の義」「先祖の由緒」「上下の名分」など）を戦術的に再利用することになったとされている。平石氏はこの福沢の戦術的転換のきっかけはこの小幡論説だったと指摘している。[61] そして『文明論之概略』緒言における福沢の彼への謝辞はこの部分で

の貢献に対するものだったのではないかと指摘している。

また第一節で紹介した『植木枝盛日記』中にみられる明治八年六月十九日の「小幡氏学者職分論」は、一見すると福沢の『学問のすゝめ』第四編の再述のように思われるだろう。

このときの小幡の演説は三田演説会資料においても残っておらず、想像の域を出るものではないが、福沢「学者職分論」における議論と小幡『上木自由之論』序は密接に関連していたのではないかと思われる部分があるので指摘しておこう。この検討が「小幡氏学者職分論」が福沢の再述ではなかった可能性を示唆するだろう。

『上木自由之論』序で小幡は、明治六年当時において出版の自由の是非についての議論はあるもののその議論には至らない点が多くあると述べている。その原因は、そもそもなぜ出版の自由について議論が為されなければならないかについての議論が論者達に足らないからであるとされていた[62]。そして、そのような状態にある理由を小幡は以下のように説明していた。

「彼ノ学者ナル者、唯政府アルノミヲ知テ、未ダ人民アルヲ知ラザレバ、其論ズル所モ亦自カラ政府ノ利害ノミヲ目的ト為シ、出版自由ノ得失ヲ議スルモ、其見ル所甚ダ狭ク、コレヲ自由ニセバ或ハ政府ノ忌諱ニ触ル、モノアラント云ヒ、或ハ官員ヲ誹謗スルノ弊ヲ招カント云ヒ、只管政府専制ノ趣意ニ害アルヲ恐レテ、陳腐鎖末ノ蝶論ニ忙シク、顧テ出版自由ノ得失ニ付テハ、未ダ其真面目ヲ看破スルコト能ハザルナリ[63]」

そして当時の学者をして「出版ハ啻ニ政府私有ノ器械ニ非ズ、民情風俗ニ関係シテ力ヲ及ボスコト最モ広ク、全国ノ盛衰モ、此一事ニ由テトス可キモノナリトノコトヲ了解セシメバ」彼らの見識も高尚に進むだろうと述べている。

右の如く小幡は福沢の有名な「唯政府あるのみを知って、未だ国民（ネーション－筆者注）あらず」とほぼ同じ言い回しによって説明している。この小幡の序文は明治六年十一月出版だが、福沢がこの言い回しを初めて使用した『学問のすゝめ』第四編の出版は明治七年一月とされている。[64] そして福沢の学者職分論のハイライトたる「日本には唯政府ありて未だ国民あらずと云ふも可なり」の部分は、左記のように出版の自由に関する記述から直接に導かれているのである。

「譬へば方今出版の新聞紙及び諸方の上書建白の類も其一例なり。出版の条例甚しく厳なるに非ざれども、新聞紙の面を見れば政府の忌諱に触るゝことは絶て載せざるのみならず、（中略）然るに今この新聞紙を出版し或は政府に建白する者は、概皆世の洋学者流にて（中略）これを概すれば日本には唯政府ありて未だ国民あらずと云ふも可なり」（『福沢諭吉全集』第三巻、五二頁）

このようにみれば、「人民」「国民」という表現こそ異なるものの『学問のすゝめ』第四編「学者の職分を論ず」における福沢の主張の重要な要素は、小幡『上木自由之論』序に先取りした形で出ていた可能性もみてとれるのである。[65] 更に『学問のすゝめ』において知識人が政府に集中することへの問題意識が初めて登場するのは、第三編「一身独立して一国独立する事」（明治六年十二月）である。

「一国中に人を支配するほどの才徳を備る者は千人の内一人に過ぎず。仮にこゝに人口百万人の国あらん、此内千人は智者にして九十九万余の者は無智の小民ならん。智者の才徳を以て此小民を支配し（中略）もと此国の人民、主客の二様に分れ、主人たる者は千人の智者にて、よきやうに国を支配し、其余の者は悉皆何も知らざる客分なり。既に客分とあれば固より心配も少なく、唯主人にのみ依りすがりて身に引受ることなきゆゑ、国を患ふることも主人の如くならざるは必然、実に水くさき有様なり」[66]（『福沢諭吉全集』第三巻、四三―四四頁）

福沢によるこの部分の刊行が『上木自由之論』の一ヶ月後であること、『上木自由之論』で小幡が翻訳した章はトクヴィルの見出しでは（見出しは訳出されず）「出版の自由はアメリカで理解されているように人民主権の必然的な帰結である」とされている部分であること、本章の冒頭が「印書ノ自由ハ特リ政治上ノ論説ヲ動カスノミナラズ、万民ノ公私ニ関スル論説ヲ揺ガシ、法律習俗ヲ変更スルモノトス」（小幡訳）となっている事実を併せて考えてみよう。先に引用した『学問のすゝめ』の二つの部分を貫く余りにも有名な「政府の領域と私の領域との区別」の論理は、トクヴィルによって人民主権の必然的な帰結とされる「印書ノ自由」、それが社会に波及し「法律習俗」をも変えるという『上木自由之論』の議論によって、福沢自身が人民主権に関するより深い理解に到達し得た結果登場したものであった可能性も指摘できるのである。このように『上木自由之論』と『学問のすゝめ』第四編の間には、小幡と福沢の思考に密接な関連性が存在していたと言うに足る素材がある。そうであるならば、明治八年六月十九日「小幡氏学者職分論」は必ずしも『学問のすゝめ』第四編

の再述ではなかった可能性があるだろう。

次に小幡と福沢の思想的関連を見出せるのは、福沢の『分権論』（明治九年十一月脱稿、十年刊）においてである。その中で福沢は、明治九年十一月に小幡によって『家庭叢談』誌上で発表されたトクヴィルの抄訳を引用している。[67] 彼によるトクヴィルの翻訳は、別掲の著作目録で示したように三回にわたって行われた。関口すみ子氏によれば、『分権論』において福沢がトクヴィルから採用したのは「public spirit が自治体を支え、さらに、「愛国心」が国を支えるという思想に関連した部分」であるという。これは共に明治九年に小幡が訳出した部分であり、かつ『分権論』の理論的支柱ともいうべき点であることからも、『分権論』にも小幡と福沢の思想的連関をみてとっても良いと思われる。[68]

以上、小幡と福沢の思想的連関を指摘してみた。これらの点においては、より一層の精査が必要であろう。そしてそのことは福沢研究に資するはずである。

③新たな小幡像への手がかり

最後に、これまでの議論をまとめた上で新たな小幡像への手がかりを探ってみたい。第一節では彼が慶應義塾の一教員にとどまらない学者として同時代の人々に認識されていたことを紹介した。第二節では彼の著作の紹介とその性格づけ、第三節では彼と福沢の関連性をめぐって考察した。これらから分かることは、初期慶應義塾は福沢一人がそのリーダーシップを担っていたというよりはむしろ小幡との共同的リーダーシップによって運営されていたように思われること、そして小幡の学識は福沢を凌ぐと同時代人たちに評されていたことである。

しかしながら彼の存在は時代と共に忘れられ、その著作もほとんど顧みられることはなくなっていった。その理由のひとつは恐らく小幡自身の中にあっただろう。明治八年十一月二十八日の『三田演説日記』において「本日ノ問題　今ノ日本ノ有様ニテ学者タルモノハ知識聞見ヲ自カラ積ム歟、或ハ積テ随テ散スルノ方便ニ心ヲ尽ス可キヤ。何レノ方ヲ緊要トスル」という問いに対して、彼は「積ムノ方」の側の意見だったという記載がある。[69] 思うに「積テ随テ散スル」ことに生きたであろう福沢とは対照的な姿勢と思われる。[70] そのことは左記の鳥谷部春汀の福沢評をみるとき、一層はっきりとするように思われる。

「経世家としては余りに広く、学者としては余りに浅く、教育家としては余りに無主義なり。彼（福沢）は観察に富みて理想に乏しく、総合の能あつて分析の能力なく、適用の才あれども創造発見の才を欠く。蓋し彼れの頭脳甚だ直覚に敏にして常に活動し、変化して止まず。一処に執着して沈思冥想するは、到底彼れの能くする所に非ざればなり。（中略）以て学者政治家の為す能はざるを為す。嗚呼彼れも亦明治の偉人なるかな」[71]

一見すると厳しい福沢評価であり、どこまで妥当と言えるかは問題視されても不自然ではない。しかし、春汀は一人の人間の資質として容易には両立しがたい諸要素から彼を分析することによって「学者政治家の為す能はざるを為す」した彼の真骨頂を鮮やかに提示してみせたともいえる。福沢が「学者」「教育家」「理想」「分析の能力」「創造発見の才」「沈思瞑想」という要素に乏しかったはずはないように思われるが、彼がこれらの要素全てに力を注ぐ訳にいかなかったであろうことは、時代に活発に応答しようとした彼の問題関心・生き方

にとっては無理からぬことだったように思われる。こうした福沢が力を注ぐ訳にはゆかなかった要素の全てとは言えないにしても、相当部分を小幡が担ったように思われてならない。第一節で検討した同時代人たちの小幡評価を想起すれば、少なくとも「学者」「教育家」「理想」「沈思瞑想」という部分は彼が担ったと言ってもよいように思われるのである。そうした要素を担うべく、福沢の共同者として「知識聞見を積む」彼が存在したからこそ、福沢は「積テ随テ散スル」活躍をよく為し得たのではなかったか。福沢自身「僕者学校之先生ニあらず、生徒ハ僕之門人ニあらず。之を総称して一社中と名け」[72]というように慶應義塾を単なる私塾にとどまらない自発的な共同結社と位置付けていたが、実際福沢の活躍は彼のような良き共同者を得られたことに大きく支えられていたように思われる。そのこと自体福沢の意図でもあったとはいえ、小幡を研究の俎上に載せて彼を通して福沢を再検討することは重要と思われる。

例えば、第二節・第三節でも紹介したように小幡は明治六年の段階からトクヴィルの翻訳を出版し、彼自身の論説でもトクヴィルを援用し、演説でもその影響を感じさせていた。このことは福沢がトクヴィルを読んで「覚書」を記した以前の段階から小幡を通して彼の言説にトクヴィルの影響があったことを示唆してもいるだろう。[73] そしてトクヴィルについて福沢よりも深く打ち込んだと思われる小幡の言説は、彼よりも平等主義的な色彩に富んでいたように思われる。明治八年二月の「内地旅行ノ駁議」ではモラルタイに相当する「人心ノ綱」について述べた部分で、立憲政体への移行・教育の普及・民権の興起と共に「国財ノ分賦平等ナラザル可ラズ」と述べて、この四つが当を得るに至れば「国家ノ元気勃焉トシテ興ル可シ」としている。国財の平等的分配まで福沢が主張したことがあっただろうか。また第二節で指摘したように明治八年五月の「嫡子ニ限リ家督相続ヲ為スノ弊ヲ論ス」でも、トクヴィルを引きながら「人間同等ノ大義」を二種類に識別した上で、均分相続法

になれば「華士族モ毀ツ可シ」「財貨ノ分賦モ其平ニ赴ク可シ」と述べていた。更に、彼が著した『小学歴史階梯』（明治十九年）の署名に「東京府平民」と記されていたことも彼の平等主義的な思想の表れと考えられるだろう。人格の高さと共に、そうした小幡の平等主義的な部分が、大庭柯公をして彼を「福翁と別趣味の人」「義塾をして現実主義以外多少の或者を存せしめたりし一流の高士」と評せしめたのかもしれない。やはり社会主義者であり、政治家を選ぶに特に人の品性を重視した堺利彦が、明治三十六年に東京市長選候補者となった彼を評して「小幡は福沢門の君子にして、福沢の名代として貴族院議員に推選せられたる人なり。彼はその先師の重任と後輩の重望とに対し、何の職につくといえども、必ずこれをはずかしめざるべきなり」と述べていたのも、彼の平等主義的な志向によるものだったのではないだろうか。[74]

おわりに

本稿では小幡の同時代評価とその著作を展望しつつ彼の思想像を考察してきた。彼が慶應義塾においても、思想においても福沢に従属する存在だったというよりは共同して義塾をリードした人物として同時代人に広く知られていたこと、彼が慶應義塾外においても広く時代に取り組んだ一知識人として評価されるべき人物だったことを確認できたのではないだろうか。また彼が福沢と共通する思想の持ち主であったことは確かなものの、彼には福沢を超えた平等主義的な志向が存在していたようであり、彼のそうした部分が義塾外の同時代人達の眼に福沢や慶應義塾とは「別趣味」を有する人物として映った可能性があることも指摘した。更に福沢と小幡が「別趣味」の人物であったことに関しては、彼が知識を「積ム」という求道者的な学者たろうと心がけたこ

とにも見出せるだろう。彼が知識を「積ム」ことを追求したことが、福沢の「積テ随テ散スル」活躍を可能にさせたように思われるのである。門下生としての姿勢を崩さなかったものの、小幡が福沢に対等に接していたことは『文明論之概略』をめぐる以下のエピソードからも窺える。[75] 福沢が明治八年にこの著を脱稿した時のことと思われるが、彼はそれを塾生達に見せて「遠慮なく批評すべし」と言ったという。その際、年少の塾生達が「一も二も大感服にて早速出版可然」と言う中、独り小幡のみが「御説は誠に結構なれども」と注文をつけたという。このエピソードで語られているのは、文中の「坊主」という言葉が殺伐に過ぎるので「僧侶」に変更してはどうかという、それ自体思想的には重要とは思われない指摘ではあるが、「御説は誠に結構なれども」と福沢に忌憚なく意見を述べる彼の姿勢に福沢と対等な立場に立つ者の姿を垣間見ることができるだろう。このような小幡の存在が、初期慶應義塾を民主的な自発的結社として成り立たせた大きな要因だったことは間違いないように思われる。

小幡を福沢の共同者というとき、必ずしもライバル関係のようなものが両者の間に存在していたという訳ではない。二人は同じ結社の共同者として活動しながらも、その資質の相違によって異なるリーダーシップを発揮していたというべきだろう。福沢が知識を「積テ随テ散スル」ことで名実共に慶應義塾を代表し、時代の表舞台で活躍したとするならば、小幡は「積ムノ方」を専らにしつつ、学問において、またその経営においても極めて能動的に慶應義塾に関わった人物だったといえる。[76] そして第三節冒頭でみたように、彼の活動は必ずしも慶應義塾に留まるものではなく、時代そのものと取り組んだといえるものであった。

彼の没後百年を迎える今日、我国でもヴォランタリー・アソシエーションをめぐる議論が高まっている。その意味で、福沢が自発的共同結社として慶應義塾を創始したことの思想史的意味の再検討は肝要であろう。共

同性のもつ意味・その在り方を検討するに際して小幡篤次郎の存在は興味深いものに思われるのである。

注

（1）初期慶應義塾を自発的結社として捉え、その固有の思想史的役割を明らかにしたものとして、松沢弘陽「公議輿論と討論のあいだ―福沢諭吉の初期議会政観―」（『福沢諭吉年鑑』第一九巻、福沢諭吉協会、一九九二年）。本稿の基礎となった視点は、この松沢氏の研究に大きく示唆を受けたものである。

（2）近年、我が国においてもヴォランタリー・アソシエーションが注目されることが多い。一口に自発的結社と言っても、その形態は様々であり、それらが有する民主的な度合いや意味合いも様々である。自発的結社の様々な形態と、それらが社会に与える影響の在り方については、Mark E. Warren, *Democracy and Association*, Princeton University Press, 1999. 中の第五―七章参照。

（3）富田正文「慶應義塾出身人物列伝　その四　小幡篤次郎」（『三田評論』六二一号、一九六三年）六六頁及び六八頁。この評伝は、小幡に関するものの中で最も詳細なものである。この時期に富田氏が彼に関する情報をまとめたことは貴重な功績であろう。この評伝なくしてはその後の小幡研究も困難を極めたであろうことは想像に難くないからである。ただ、ここでは小幡を「福沢先生の女房役」とみなす評価に留まっていると思われる。例えば、『学問のすゝめ』初編が福沢・小幡合著となっている点について、福沢が上士の子弟だった小幡の名を利用したと説明されており、彼を独自の思想史的役割を果たした思想家としては捉えていないことが窺えるだろう。

（4）西沢直子「小幡篤次郎考Ⅰ―書簡にみられる中津士族社会との関わり―」（『近代日本研究』第一七巻、慶應義塾福沢研究センター、二〇〇〇年）、「小幡篤次郎考Ⅱ―慶應義塾教職員として―」（同第一八巻、二〇〇一年）「小幡篤次郎考Ⅲ―「女工場の開業を祝するの文をめぐって―」（同第一九巻、二〇〇二年）。

（5）前掲西沢論文、及び前掲富田。加えて、進藤咲子「『英氏経済論』及び原文の翻刻並びに解説」（『明治時代語の研

究―語彙と文章―」明治書院、一九八一年）にも小幡の略伝がある。

（6）林毅陸「門野先生を憶ふ」（『門野幾之進先生 事蹟・文集』小泉信三・板倉卓造・今井利喜三郎・麻生義一監修、門野幾之進先生懐旧録及論集刊行会、一九三九年）七三一頁。

（7）高橋誠一郎「門野教頭」前掲『門野幾之進先生 事蹟・文集』七三三頁。

（8）前掲『門野幾之進先生 事蹟・文集』二四五頁。

（9）「弔 小幡先生」『学報』九〇号。

（10）この点については松崎欣一『三田演説会と慶應義塾系演説会』（慶應義塾大学出版社、一九九八年）九一―九二頁に指摘がある。

（11）前掲松崎、九三頁。例えば、植木のある日の記述について松崎氏は「演説者名について『植木日記』が福沢、大石、萩原の三名しか押えていないことが興味深い」と述べている。

（12）前掲松崎、五四〇頁。

（13）『植木枝盛日記』『購求書日記』『閲読書日記』のいずれも『植木枝盛集』（岩波書店、一九九〇年）第七巻、八巻所収。

（14）「田中正造昔話」『田中正造全集』（岩波書店、一九七七年）第一巻、八九頁。

（15）三宅雪嶺『同時代史』（岩波書店、一九五〇年）第二巻、一二八頁。

（16）前掲三宅、第二巻、四〇六頁。小幡の貴族院議員勅撰については明治二十三年十月一日付『読売新聞』紙上にその経緯の風聞が記載されている。それによれば、政府は元々福沢を勅撰するつもりだったのが、それを福沢が聞き及んで煩わしく思い、自分の代わりとして小幡を推薦したという。

（17）前掲三宅、第三巻、四五八頁。

（18）矢野文雄「大隈侯昔日譚 補」（『矢野竜渓資料集』大分県先哲叢書、第七巻）四五一頁。

(19) 前掲松崎、五四六頁。

(20) 『馬場辰猪自伝』(『馬場辰猪全集』岩波書店、一九八八年)第三巻、六四、六七頁。この点については前掲西沢論文「小幡篤次郎考Ⅱ」において言及されている。

(21) この時期には犬養毅、矢野文雄、尾崎行雄らが『朝野新聞』に在籍していたことから、この小幡評は彼等慶應系の人物によって書かれたか、そうではなくても彼等に示唆を受けて書かれた可能性が相当程度あるように思われる。犬養、矢野、尾崎の『朝野新聞』移籍については西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』(至文堂、一九六一年)一六三頁。彼等が『朝野新聞』を去ったのが二十三年末であるから、小幡評が掲載された同年三月には確実に彼等は朝野新聞に在籍中だったことになる。

(22) この「世に阿らず、威武権勢に屈せず、政事界商業界に全く関係なき者」という小幡への評価を証するものとして、小幡没後、時事新報紙上で十回にわたって連載された「小幡先生逸話」を挙げることができる。明治十年に小幡が外遊した際のエピソードである。当時の多くの知識人同様、政府の費用で行くこともできたにも拘らず、彼はあくまでも自分の費用で行ったという。明治三十八年五月十八日付『時事新報』「小幡先生逸話(四)」によると、「其頃先生(小幡)の地位を以てしては洋行費を出さしむるが如きは決して困難の事に非ず。又斯る事例は実際世間に乏しからざることなれば、若し先生にして其辺に意あらば如何ともなる可き筈なるに先生は漫に政府の力に依頼するを好まずとて終に自費を以て洋行したるなり」というものである。費用の出所は己の著訳書だったと冒頭に書かれている。また、彼が「政事界商業界に全く関係なき者」という『朝野新聞』の指摘は、彼が明治生命保険会社の設立に関わり、また井上馨とも個人的な交流があったことから必ずしも正しい指摘とはいえない。恐らく、政治家や官僚ではなく、実業家としても正面から会社経営に携わっている訳ではない程度の意味であろう。

小幡の明治生命設立への関与に関しては『明治生命百年史』(日本経営史研究所、昭和五十六年)二五頁。彼も明治生命設立には関わったが、本格的に取り組んだのは阿部泰蔵である。彼が井上と交流があったことについては『小

泉信三全集』（文芸春秋、昭和四十三年）第一三巻一四三―一四四頁に言及がある。彼の外遊に際して共に同じ船で発った人物に井上馨、穂積陳重がいたことが記され、小幡が小泉信吉、中上川彦次郎と共に井上との勉強会に参加していたのではないかという推察がされている。また小幡「条約改正論」（『交詢雑誌』七八号、一八八二年三月）中には、外務卿だった井上馨が条約改正交渉について「一切我（小幡―筆者注）ニ聴カス」という記述がある。

(23) 鳥谷部春汀「物故の三名士」『春汀全集』第三巻（博文館、一九〇九年）、二二八頁。

(24) 津田権平編輯「新聞投書家列伝」『新聞史資料集成』明治期篇（ゆまに書房、一九九五年）第三巻。本書解題では、津田に関して東京府士族、有信斎主人と号したこと、多数の編著があること以外の経歴は未詳とされている。また、この小幡評の中で彼が長崎で蘭学修行をしたという記述があるが、そのような事実はない。福沢の修学に関しても誤認とみられる記述が見受けられる。この記事に些か事実誤認があるのは間違いない。

(25) 諸橋轍次『大漢和辞典』によると「才幹」の語義は、「はたらき。うでまへ。能力。材幹。」であり、「才幹之士」で「才能があって大事に堪へる人」という意であるとされている。「材幹」を調べると、「はたらき。うでまへ。幹は技倆」とある。津田が当該部分で使用した「才幹」の意味は「才幹之士」の「大事に堪へる」意を重視するか、「幹」＝「技倆」の意を重視するかで解釈の相違が生じるだろう。前者では小幡は大事に当たる能力において福沢よりも圧倒的に劣っていたことになる。しかし、この後のウェーランドにまつわる津田の小幡評をみれば、必ずしも彼が小幡をそのように捉えていなかったことは推察できる。したがって、ここでの「才幹」の意は、「才能の用い方（技量）」と解して、「自らを上手く世にプロデュースする能力」というくらいの意味に解するのが妥当に思われる。

(26) 小幡が幼少から漢籍を修め、福沢の勧誘時にも洋学修行は思いもよらないと姿を隠したというのは幾つかの略伝に共通したものだが、小幡自身は彼の叔父（竹下郁蔵）を通じて幼少の頃から福沢と会ったことがあり、また、江戸出府前に既に福沢『西洋事情』を出版前に読んでいたという。明治三十八年二月三日、福沢の五周忌紀年講話会における小幡の回想である。『慶應義塾五十年史』（慶應義塾、一九〇七年）二八七頁。この点について、服部礼次郎「塾の

三尊　小幡（篤）・門野・鎌田の三先生」（『慶應ものがたり　福沢諭吉をめぐって』慶應義塾大学出版会、二〇〇一年）四五六頁に言及がある。『西洋事情初篇』の刊行が慶応三年（一八六六）で、小幡の出府は元治元年（一八六四）なので、小幡が中津で『西洋事情』を読んだというのは江戸出府直前のことと思われる。なお、小幡の家系については『小幡英之助先生』（今田見信著作集Ⅱ、医歯薬出版、一九七三年）に詳しい。

(27)　小幡が温良な性格だったことは各人物評に共通する点である。しかし彼のパーソナリティについて「小幡先生逸話（七）」（『時事新報』一七五二号、明治三十八年五月二四日）では「温厚篤実とか温良恭謙とか申様なる言語を以て評すべく中には猛烈の心火燃ゆるも奇を好まぬと云ふ心にて之を押へ万事穏和を主とせられたるやうなれば」と記されており、単に温和な性格だったという訳ではなさそうである。彼が意識的に「万事穏和」を図っていたという点は、彼の性格がそうさせたというにとどまらず、そのような形で彼が一定のリーダーシップを発揮していたことを示すもののように思われる。この二日前の「小幡先生逸話（六）」でも温和というだけでは語り尽くせないエピソードが紹介されている。

(28)　『柯公全集』（柯公全集刊行会、一九二五年）第二巻、二三頁及び二七頁。

(29)　『交詢社百年史』（慶應通信、一九八三年）一四三頁。

(30)　『交詢雑誌』一二三号（明治十六年六月二五日）。

(31)　先に紹介した大庭柯公の「人物分布観」の中では、福沢について「試みに中津に遊びて市中に問ふに福沢諭吉の名を以てせよ、彼等の多くは皆いふ「あの足軽の子が」と一冷笑に葬り去る」と述べられている。福沢自身が『旧藩情』で述べたような空気が明治末年にも色濃く存在したとするならば、明治十六年の植木の演説時にも上士の家系出身者だった小幡に対して（福沢とは逆に）地元の人々の肯定的な感情が存在していたであろうことは否定できないだろう。

(32)　『富田正文氏旧蔵書籍目録』（慶應義塾福沢研究センター資料8、二〇〇二年）、三橋猛雄『明治前期思想史文献』（明治堂書店、一九七六年）、丸山信編著『福沢諭吉門下』（『人物書誌大系』30、紀伊国屋書店、一九九五年）。

(33) 小幡著作目録の作成にあたって『郵便報知新聞』復刻版（郵便報知新聞刊行会、柏書房、一九八九年）一―八二巻にわたって小幡論説の有無をチェックした。

(34) 『植木枝盛集』第七巻六六頁。前掲松崎『三田演説会と慶應義塾系演説会』でも言及・再録されている。

(35) 小泉仰『JSミル』（研究出版社、一九九七年）二五三頁。

(36) 丸山真男『「文明論之概略」を読む』下（岩波新書、一九八六年）三一二頁。小幡を「百科全書家的な著訳活動」をした人物として紹介している。

(37) 小幡による究理書『天変地異』『博物新編補遺』が科学的啓蒙書の先鞭として明治初年に果たした意義は、『日本科学技術史大系』（第一法規出版、一九六八年）第六巻、第八巻にて紹介されている。そこでは封建思想を打破し、民衆に合理的思考・自然解釈を普及させた究理学啓蒙書の中の重要なものの一つとして、福沢『訓蒙究理図解』と並んで小幡の著作が紹介されている。中でも『博物新編補遺』は、物理・化学から博物・生理まで科学全般にわたる日本最初の小学校程度の科学教科書だったことが解説されている。『博物新編補遺』については松永俊男氏の研究がある。松永俊男「チェンバース著『科学入門』と小幡篤次郎訳『博物新編補遺』」（『桃山学院大学人間科学』第二四号）。

(38) ウェーランド『経済学』と福沢の思想形成との関連について論じた研究は膨大であり、ここにその全てを挙げるのは不可能である。代表的なもののみ挙げておく。伊藤正雄「福沢の筆に投影したウェーランドの『経済論』」（『福沢諭吉論考』吉川弘文館、一九六九年）、飯田鼎「黎明期の経済学研究と福沢諭吉（その一）――日本経済学史研究序説」（『三田学会雑誌』六五巻九号、一九七二年）、進藤咲子「『英氏経済論』及び原文の翻刻並びに解説」（『明治時代語の研究―語彙と文章―』明治書院、一九八一年）、藤原昭夫『フランシス・ウェーランドの社会経済思想―近代日本、福沢諭吉とウェーランド』日本経済評論社、一九九三年、千種義人「ウェーランド『経済学要論』」（『福沢諭吉の経済思想　その現代的意義』同文館出版、一九九四年）。

(39) 『宗教三論』と福沢の宗教観との関連については小泉仰氏の研究がある。小泉仰「ミルの『宗教三論』と福沢諭吉

の宗教観」（『近代日本研究』第二巻、慶應義塾福沢センター、一九八六年）。同様のものとして小泉氏には他に前掲『J.S.ミル』注（35）中の第七章三節「ミルと福沢諭吉」及び『福沢諭吉の宗教観』（慶應義塾大学出版会、二〇〇二年）第四章「ジョン・スチュアート・ミルと福沢諭吉」がある。

（40）家永三郎『植木枝盛研究』（岩波書店、一九六〇年）一一六頁。前掲西沢論文「小幡篤次郎考Ⅲ――「女工場の開業を祝するの文」をめぐって――」（『近代日本研究』第一九巻、二〇〇二年）。

（41）前掲西沢論文「小幡篤次郎考Ⅲ」一五六頁。

（42）『アメリカの民主主義』の原書については、福沢や小幡がみたと思われるヘンリー・リーヴ英訳版、福沢手沢本（一八七三年）を利用した。正確な題名は、*The Republic of the United States of America, and It's Political Institutions, Reviewed and Examined*, by Alexis de Tocqueville. である。小幡が引用した「depraved taste for equality」はこの原書の五五頁に出てくる。

（43）小幡がこの論文を執筆した動機が彼の生まれ合わせた境遇と関係していたであろうことは想像に難くない。彼は二百石取りの上士の家に生まれたとはいえ、家系上は次男であり（血統上は長男）、部屋住みを余儀なくされる運命にあった。この点については前掲（注26）『小幡英之助先生』六―八頁に詳しい。そのような境遇に生まれた篤次郎の回想が「小幡先生逸話（十二）」（『時事新報』七七七七号、明治三十八年六月十八日）に掲載されている。彼は、「譜代思顧（ママ）の家の子にても其家の二三男に生るれば御能拝見とか或は武芸上覧とかの折節に非ざれば一歩も御本丸へは入るを許し給はざりし」と述べていた。同様に、家系上次男であり部屋住の境遇の小幡にとって、江戸へ出たならば養子の口も多いだろうと彼の母親に福沢が息子の江戸出府を説得したという経緯が『福沢諭吉伝』に記載されている。石河幹明『福沢諭吉伝』（岩波書店、一九三二年）四二四頁。このような意味では、小幡のこの論説の執筆動機の重要な部分が家制度にあったことは間違いないと思われる。

（44）トクヴィルが『アメリカの民主主義』で述べたような平等化された状態におけるペシミズムが小幡の言説に現れる

のは明治二十一年、『政論』第一号上での祝詞においてである。小幡はそこで最多数人民の最大幸福というベンサムの影響を匂わせる言葉を用いながら、それが衆愚に陥ることの危険を指摘していた。

(45) 小幡のバックル引用部分は、*Buckle's Miscellaneous Works, vol.I*, London Longmans, Green, and co. 1872の「断片集」中の、Origin of the Middle and moneyed classes（一頁弱）のほぼ全訳である。小幡は「英国ノ「バツクル氏ペルセ、ソサイティ」出版ノ「ヲ子スチー、ヲフ、ジスエージ」の一章と述べているが、それを見つけることはできなかった。この小幡の中等社会論は福沢のそれとは些か異なっていた。ミドルクラスの担い手が福沢にあっては、学者、士族を念頭に置いていたように思われるものの必ずしも明確ではなかったのに対して、小幡はその担い手を農工商身分の知識層、及び財産を有する士族と明言していた。士族を含めるものの、小幡の中では明治維新は砲艦の時代への兵制の改革でもあり、弓矢で武装した武士階級は少数の例外を除いて、その改革と共に家産を失って国を負担する余裕がないという認識だった。福沢の中等社会論における担い手の設定の曖昧さについては、遠山茂樹『福沢諭吉―思想と政治との関連―』（東京大学出版会UP選書、一九七〇年）、ひろたまさき『福沢諭吉研究』（東京大学出版会、一九七六年）参照。

(46) 「歴史教科書総解説」『日本教科書大系』（講談社、一九六二年）近代編第二〇巻、四九九頁。

(47) ここに紹介するのは「祝詞　政論ノ発行ヲ祝ス」『政論』第一号（政論社、明治二十一年六月一日発行）である。この祝詞の末尾に「明治二一年五月　辱知　小幡篤次郎敬具」と署名がある。またこの祝詞に関して、『読売新聞』に記事がある。「〇政論　噂高き後藤伯の政治機関政論と題せる雑誌は昨一日を以て第一号を発行されたり。開巻第一は小幡篤次郎氏の祝詞にして論説欄内には発行の旨趣を始め多くの有益なる論文を載せたり」とある。『読売新聞』明治二十一年六月二日付。

(48) 坂野潤治『近代日本の国家構想』（岩波書店、一九九六年）第二章第三節参照。

(49) 富田正文『考証福沢諭吉』（岩波書店、一九九二年）では後藤と福沢の関係についての記述は散見されるものの、

大同団結と福沢の関連については明示されていない。

(50) 「小幡君鴎遊館宴会の祝辞」『交詢雑誌』三一六号、明治二十一年十二月十五日。

(51) 前掲富田注（1）六八頁。ここに挙げた他にも、小幡は東京学士院会員、明治生命設立発起人、貨幣制度調査会委員も務めた。

(52) 明治十二年十月七日付岩橋謹次郎宛福沢書簡、『福沢諭吉書簡集』第二巻、二五六頁。

(53) 明治十二年八月二十八日付奥平毎次郎宛福沢書簡、『福沢諭吉書簡集』第二巻、二四二頁。

(54) 「交詢社第一紀年会報告」『交詢雑誌』第三七号、明治十四年二月五日。

(55) 大西理平『朝吹英二君伝』（図書出版社、一九九〇年）七五頁。この点につき、『交詢社百年史』五〇五頁に言及がある。また、『朝吹英二君伝』に関する言及がないものの、交詢社の名の由来が小幡にあることについては、前掲服部『慶應ものがたり』注（26）四五五頁にも言及がある。

(56) 前掲『門野幾之進先生　事蹟・文集』二〇二頁。

(57) こうした「人心の結合」の必要性の重要視は、小幡が人心の土崩瓦解の危機を維新後の日本社会に切迫しているものとして認識し、その対応策としてナショナリティの確立の必要性を痛感していたことに因る。こうした危機感は小幡に特異なものではなく当時の知識人達に共通した課題であったろう。明治八年の「内地旅行ノ駁議」においても、小幡はナショナリティの確立の必要性を「人心ノ綱」の醸成に求めていたし、明治十五年の「条約改正論」（『交詢雑誌』七八号）においても同様の危機感を示していた。

(58) ここで福沢が政党と自身の事業との間に距離を置いたと述べた点については、あくまでも彼が直接政党に関与する意図がなかったという指摘であることに留意されたい。福沢の政党観に関しては、『民情一新』（明治十二年七月脱稿、八月刊行）を境に、「党派性」故に否定的だったそれまでの立場から「政体の中心的存在」として政党を位置付け直したという山田央子氏の精密な指摘がある。すなわち、彼が「イギリス派」でありつつも、依拠するモデルがブラッ

クストンの「混合政体論」から、ウォルター・バジョット、アースキン・メイ、アルフィアス・トッドら（中でもバジョット）といったブラックストン的「混合政体論」の再解釈・修正を試みた著作に変化していたというものである。ミル、スペンサーらが政党・党派に関して部分的利益を代表するものとみなして公益を妨げると否定的に評価していたのとは対照的に、メイやバジョットの政党に関する議論は、政党こそが代議制度に本質的なものとするものだったという。（山田央子『明治政党論史』創文社、一九九九年、第二章第二節および第三節）

本稿で述べた政党への福沢の慎重な姿勢というのは、このような議論とは位相を異にしたものであり、あくまでも現実での関わり方という次元での議論である。山田氏も注（前掲書第二章注86）で付言しているように、『民情一新』以降も福沢は直接政党に関与することを避け続けた。例えば、本稿での演説でもそうであったし、時事新報「本紙発兌之趣旨」（明治十五年三月一日）でも「然るに我党の長者は福沢先生なれども、先生は本来青雲の志なくして、今後も生涯政治に参与することなかる可しと明言したる者なれば、固より之に向て政党の首領たらんことを求む可らず。是亦我輩が此ま、の有様にて直に政党たる可らざるの原因なり」（『福沢諭吉全集』第八巻、九頁）とされていることからも、政体構想とは別に、現実においては彼が一貫して政党と距離を保とうとしていたことが分かるだろう。

(59) 小幡が、表現の受け取られ方を考慮する慎重な姿勢を有していたことは、福沢『文明論之概略』に対して「坊主」という表現が殺伐に過ぎるので「僧侶」としてはどうかと意見を述べていたことからも分かる。「小幡先生逸話（七）」『時事新報』七七五二号（明治三十八年五月二十四日）。なお、このエピソードについては、前掲西沢論文「小幡篤次郎考Ⅰ」一五八頁に指摘がある。

(60) 平石直昭「福沢諭吉の戦略構想―『文明論之概略』期までを中心に―」（『社会科学研究』第五一巻一号、一九九九年）。

(61) 福沢の「報国心」に関する旧モラルタイの再利用については、のちに彼は旧モラルタイというよりも、「報国心」に自己利益を組み込むことを重視するようになっていったと松沢弘陽氏は指摘している。松沢弘陽「社会契約から文

明史へ―福沢諭吉の初期国民国家形成構想・試論―」（『福沢諭吉年鑑』第一八巻、一九九一年）、二一〇頁。

(62) 『上木自由之論』について、富田正文氏は、トクヴィルの訳出であることを述べた上で、「当時偽版の横行の熾んであった事実と思ひ合わせれば、此の書の出版は特に意義の深いものを感ずる」と指摘している。富田正文「小幡氏兄弟の著訳書」『福沢諭吉襍攷』（三田文学出版部、一九四二年）三七四頁。しかし、この書の意図は偽版への対応策というよりも、人民主権を関心の源にしたものと思われる。

(63) 小幡篤次郎『上木自由之論』（『明治文化全集』日本評論社、一九六八年）第二巻、一二九頁。

(64) 戸沢行夫「福沢諭吉の執筆活動と明六社――『文明論之概略』の成稿に関連して――」（『福沢諭吉年鑑』一五巻）八三頁。

(65) 小幡と福沢の言い回しがほぼ同じであるといっても、「人民」と「国民」の相違は重要であろう。『学問のすゝめ』第四編において福沢はこの二つの語を使い分けているように思われる。この点については今後検討を進めてゆきたい。

(66) この点については、松田宏一郎「福沢諭吉と「公」・「私」・「分」の再発見」（『立教法学』四三号、一九九六年）九三―九四頁に示唆を受けた。

(67) 『分権論』において福沢が小幡訳と断って引用した部分は、以下の二箇所である。『福沢諭吉全集』第四巻二六七頁及び二七五頁。更に地の文でも引用している部分がある。但しこの点については福沢が自ら『アメリカの民主主義』を読んで執筆した可能性も大である。

(68) 関口すみ子「福沢諭吉の「徳」と「家族」」（『福沢諭吉年鑑』二八号）一一〇頁。同様に『分権論』と小幡の訳出の関連に触れたものとして、前掲松田論文一三五頁。松田氏は『分権論』と小幡訳について、福沢の命を受けて小幡がトクヴィル訳出をした可能性と小幡を通じて福沢がトクヴィルについて知見を得た可能性の両方を示唆している。

(69) 『三田演説会資料』（慶應義塾福沢研究センター資料四、一九九一年）四〇頁。

(70) 福沢がそのような姿勢であったことは、「抑も余が著訳書は甚だ少なからずと雖も、随て作れば随て散じ、所見を

天下に披露したる後は所謂成行次第に任せて主人は曾て相知らず、」という彼自身の言葉にもみて取れるだろう。「福沢全集緒言」『福沢諭吉全集』巻一巻、三頁。

(71) 「福沢諭吉翁」(『春汀全集』第二巻第五編「教学界月旦」)三八七頁。

(72) 慶応四年、山口良蔵宛福沢書簡、『福沢諭吉書簡集』第一巻(岩波書店、二〇〇一年)、九三頁。

(73) 同様の指摘として前掲関口論文一〇九頁。

(74) 柯公については注(28)『柯公全集』参照。堺の小幡に関する記述は『堺利彦全集』(法律文化社、一九七一年)第一巻、二七四頁。

(75) 「小幡先生逸話(七)」『時事新報』第七七五二号(明治三十八年五月二十四日)このエピソードは小幡と共に元治元年に福沢塾に入塾した浜野定四郎による回想。小幡が義塾の経営にも尽力したことは、注(4)西沢論文「小幡篤次郎考Ⅱ」に詳しい。

(76) 明治八年に小幡は自宅において塾生を相手にミルの経済学、論理学を精密に輪講していた。また、明治九年には自宅に塾外の人々を招いて「講話会」を開き、原書を読めない人々にトクヴィルの「米国民政論」を講説したという。集まったのは初老以上の人々で毎夜十余名集まったという。いずれも「小幡先生逸話(四)」(『時事新報』七一四六号、明治三十八年五月十八日)。

〔資料編　小幡篤次郎の同時代評価〕

本論の中で紹介した小幡篤次郎の同時代評価の中で、人物評論の分野で彼について書かれたものを左に記載する。付した番号は本論中のものに対応している。

④『朝野新聞』明治二十三年三月五日

小幡君足下。当今の世に於て、学者君子を以て、厳然自ら持すること君が如きは、極めて罕なり。学を衒ひ、名を釣る世の中に於て、勉めて其学識を韜晦して以て社会の裏面に棲息すること君が如きは、極めて罕なり。腹中に万巻を貯へて、富めるを矜らず、皮裏に春秋を懐ひて、未だ曾て之を口にせざる君が如きは、極めて罕なり。之に接すれば、温乎として春日の如く、霞然として春風の如く、之を窺へば、珠の嚢中より微に光を洩らすが如く、魚の淵底より陰々として頭を動かすが如し。要するに粗朴なる外皮を以て、霊妙なる徳量を包蔵せり。即ち此処余の最も貴ぶ所なり。蓋し立言者の処世法に於て吾輩一説あり。凡そ今の世に在りて書を読み筆を執る者、其名の隠れざるを憂ひずして、其名の顕はれざるを憂ふるもの、滔々皆是れなり。左なきだに声名は顕はれ易く、材識は進み難く、動もすれば名実不均を致すことを免れざるに、彼の才子者流は、之に反し、乳臭の口を以て明りに古今の大家を罵言し、支離滅裂読むに堪へざる文字を並べて、一知半解の著書に従事し、一たび都下の文壇に上れば、某先生の名早や四方に伝播し、籍々称揚して措かず。左れば立言者の世に処する先づ勉めて其名を頼み、其声を低ふし、而て自ら省みて、攻修已む無くんば、名実平均を得るに庶幾し。余此

説を持する久し。故に君の謙退韜晦に於て亦歎美已む能はず。

然りと雖も慶應義塾あることを知るもの、必ず小幡篤次郎君あることを知り、福沢翁の名を知るもの、誰か君の名を記せざらん。一世の推重此の如し。而して未だ曾て一著書の以て世に公けにせざるは、君が為めに深く惜まざるを得ず。夫れ著書の事、学者の業、甚だ難し。君が如き世に阿らず、威武権勢に屈せず、政事界商業界に全く関係なき者にして、始めて此に従事すべし。君其れ之れに当れ。謙退過度は吾輩の取らざる所なり。

⑤鳥谷部春汀『人物月旦』「物故の三名士」明治三十八年五月

三田の隠君子小幡篤次郎翁も亦終に過去帳に登録せられたり。慶應義塾といへば、先づ福沢先生を連想し、福沢先生の名をいへば、又必らず小幡翁を連想せざるを得ず。慶應義塾は福沢先生ありて始めて起り、其の学風は又先生に依りて造られたりき。然れども内に在りて其の校風を維持し、補養し、且つ進暢せしめたる功の大半は、之れを小幡翁に帰するの至当なるを覚ゆ。

翁は福沢先生の如く、人を吸集するの磁石力なく、世を指導するの先見を有せざりしと雖も、其の個人としての性格は殆ど円満具足の域に達したるもの丶一人なりき。福沢先生は一面に於ては往々悪辣手段を弄して対手を驚かすことありしと雖も、他の一面に於ては極めて親切にして慈愛に富み、寛厚にして衆を容る丶の量ありき。先生の有したる此の二面は、翁の平温なる言動を伝へて、一層大なる感化を義塾の内外に与へたるもの丶如し。小幡翁は酸味を取り去りたる福沢先生にして、福沢先生は小幡翁と相待つて義塾の事業を大成したりと謂はざる可からず。

翁は十三歳にして善く白文を訓下し、弱冠にして既に旧藩黌進修館の教頭となりしといへば、其の学才の凡

ならざりしを知るべし。然れども翁の身を起したるは、福沢先生の誘掖に頼るもの多かりき。翁を勧めて上京せしめたるも福沢先生なりき。翁に英学を教へたるも、亦福沢先生なりき。翁の運命は半ば福沢先生に依て定められたりといふべし。而も先生は翁を待つに門下生を以てせずして友人を以てしたりき。先生は慶應二年の頃、既に翁を塾頭に挙げて義塾の監督を託したりき。以て先生が如何に翁の人物を推重したりしかを推知するに足る。爾来翁と先生とは、異体同心相分つべからざるの関係を相為して、義塾の事業に協力すること四十余年。先生世を去りし後は、義塾に於ける大小の事自ら之を統宰して、更に先生の遺図を恢弘せむことを期したりしが如し。不幸にして翁も亦終に先生の後を追ふて白玉楼に上れり。余は慶應義塾の為に好個の統宰者を失ひたるを惜む。

翁は曾て東京学士会院の会員に当選したりと雖も、翁は学者として成功したる人にあらず。又会社銀行の重役たりしと雖も、翁の本領は実業家たるに在らず。翁は明治の教育家なり。而も智育に於ける教育家に非ずして、寧ろ徳育に於ける教育家たるに近かし。故に其の人物の重望ありしに拘らず、其の生涯は赫々たる光輝を有せざりき。是れ翁の翁たる所以歟。

⑥津田権平編『新聞投書家列伝』小幡篤次郎君　明治十四年六月

其容貌鄙野ニシテ一文久ノ値ナシト雖モ五車七科ノ書ハ脳漿裡ニ横逸スルアルニ至ツテハ其呼値幾千百ナルコトヲ知ラザルナリ。君幼ニシテ漢籍ニ耽リ四書六経諸子百家ノ学ヲ切磋琢磨スルニ怠タラズ。学業益々進ムニ至リ愈々謙遜辞譲ニシテ眼一丁字ヲ知ラザルモノ、如シト。且ツ父母ニ従ヘテ最モ孝養ニ厚ク友ニ交ツテ能ク情誼ヲ竭シ当時郷人ノ模範トシテ君ヲ景慕セザルモノナシト云ヘリ。

君ガ総角ノ頃米使ノ花旗ヲ相州洋ニ飄颺セシヨリ全国之ガ為メニ物情騒然トシテ人心洶々トシテ宛カモ天ヲ破リ地ヲ裂クノ霹靂頭上ニ轟キ渡ツテ残夜ノ夢魔ヲ攪破スルガ如ク人ヲシテ周章錯愕手ノ舞ヒ足ノ踏ム所ヲ知ラザラシム。君鎮心静慮大ニ見ル所アツテカ忽チ漢書ヲ抛チ英書蘭典ヲ繙キ先ツ彼ガ事情ノ如何ヲ窺フニ若カズト。是ヨリ日夜吃々粋励シテ蟹行ノ書ヲ研磨セント崎陽ニ客遊シテ蘭典ヲ精究シ東武ニ転ジテ英書ヲ考究スル等此間蛍火雪窓幾多ノ苦辛ヲ嘗メ尽シテ思ヲ風月煙花ニ絶チ情ヲ温袍安逸ニ割キ大ニ欧米諸州ノ典故ヲ繙キ其風土人俗ノ如何ヨリ政治経済ノ学等其蘊奥ノ理義ヲ推究セリト。

是ト同時ニ於テ故山ノ学友タル福沢諭吉君ナルモノモ亦タ夙トニ君ト所見ノ同ジキモノアツテカ志ヲ共ニシ蘭書ヲ浪華ノ緒方洪庵先生ニ学ビ去テ崎陽ニ客遊シ転ジテ東武ニ来リ。旧幕府ノ蕃学校ニ入リ外交往復ノ書牘ヲ掌ドリ尚ホ又タ幕ノ使臣ニ従行シテ米国ニ航シ茲ニ留学シ英書ヲ研究シ尚ホ又タ転ジテ欧州ニ航シ大ニ西洋諸国ノ事情ヲ探求シ且ツ感想スル所ノモノ甚タ多シト云フ。慶応ノ始メ帰朝シテ東武ニ客寓ス。此時幕府ノ末路ニ際シ天下兵馬倥偬殺気空ニ横ハリ霧海ノ南針其感触ヲ失フテ政綱大ニ衰ヘ乱秦ノ緒ヲ見ルガ如ク人心向フ所ナク流離敗壊シテ国家遂ニ土崩瓦解ノ運ヲ訓致スルニ至レリ。此時ニ方リ人智ノ以テ未ダ西洋各国ノ政教風俗ノ如何ヲ暁ルアタハザルガ故ニ自然ト蟹行書ヲ読ム者ヲ悪ムノ奨アルノミナラズ鎖港攘夷ノ論ヲ骨張スルノ士人大刀ヲ撫シテ市上ニ徘徊ス。

福沢君其兇暴ヲ避ケテ市ニ隠レ小幡君ト共ニ謀ツテ時機ノ移ルヲ待チ慶応ノ末年ニ当リ芝新銭座ニ一学舎ヲ設ケ名ケテ慶應義塾ト号シ大ニ子弟ヲ集メテ英書ヲ教授スルノ業ヲ起シ傍ラ西哲ノ諸書ヲ翻訳シ始メテ文明ノ種子ヲ我国人ノ眼裡ニ蒔キ人文ノ理茲ニ漸ヤク萌芽ヲ抽ントス。而シテ福沢君ガ茲ニ慶應義塾ヲ設クルモ皆是レ小幡君ガ相助クル所ノモノアルニヨリ終ニ其盛力ヲ得ルニ至レリ。其西書ヲ翻訳スルヤ必ラズ小幡君ノ校正

雌黄ヲ経ルニアラザレバ決シテ上梓スルノコトヲナサズト。是レ蓋シ学力ノ福沢君ニ出ツルコト一等ヲ加フルガ故ナリト。其文章ノ如キ原ト漢籍ノ資アルガ故ニ福沢君モ常ニ一歩ヲ君ニ譲レリト云ヘリ。然レドモ惜ムベシ其才幹ノ一点ニ至ツテハ迚モ福沢君ト并ヒ馳スルコトアタハザルガ故ニ進退左右ノ指揮ヲ受ケザルヲ得ズ。是レ則チ福沢君ガ名声ノ天下ニ伝播シ世ニ先生ヲ以テ知ラレタルナリ。夫レ人此二君ガ事業ノ上ニ就テモ尚ホ能ク才幹ノ尊キ学識ノ上ニ出ツルコト之ニ徴シテ見ルベキナリ。

而シテ現今中等以上ノ地ニ立テ社会ノ盛力ヲ得ルモノ多クハ此義塾中ヨリ起ルモノ鮮少ナラザルナリ。其最モ多キモノハ一管ノ毫ヲ拈ツテ天下ノ文明ヲ冥々ノ中ニ賛成シ三寸ノ舌ヲ掉テ一国ノ人心ヲ感覚ノ間ニ作興スル新聞記者ト演説論者トハ亦タ是レ此義塾中ヨリ輩出スト。実ニ君等ガ天下ノ人才ヲ陶冶シ一国ノ人智ヲ開発セシ等ノコトタル其功モ亦タ重且大矣ナラズヤ。

明治改元ノ後官軍大挙シテ徳川氏ノ臣属等ヲ東台ニ征討スルヤ此事固不意ニ起リタルガ故ニ満都ノ人心ハ戦々競々ノ思ヲナシ周章狼狽シテ路幼婦女ノ市街ニ流離頓倒シテ悲惨ノ声天地ニ塞ガルバカリノ情況ナリシガ此時ニ方ツテ福沢諭吉君ハ偶々慶應義塾ノ講堂ニ座シ生徒ヲ集メテ英氏ノ経済書ヲ講読セラレ居タリシガ忽チ霓虎野ニ吼ヘ迅雷空ヲ蹴テ響キ来ルガ如キアリ。仰テ之ヲ見レバ硝煙蒸々トシテ雲ノ如ク天日モ為ニ隔離セラル、ニ至レリト。衆皆之ヲ見テ騒々焉タリ。君之ヲ制シ自若トシテ経済書ヲ講セラレシトハ実ニ其勇膽轄慮ナル尋常一片ノ窮措大ガ企及スベキコトナラザルナリト夙トニ此評判ノ高ク人皆相伝ヘテ曰ク福沢先生ハ誠トニ豪傑ナリ。此人ヲシテ廟堂ニ立シメザルハ最モ遺憾ナリゾト黄口ガ之ヲ唱ヘテ遂ニ其事実ノ全ク小幡君ナルコトヲ知ラザルモノ多シト云フ。人トナリ孰レカ信孰レカ非ナルヤハ未タ之ヲ知ルアタハズト雖モ亦君ノ如キ人ニシテ沈勇ナラザルモノハアラジ。此故ニ或電光石火ノ中ニ書ヲ講ジテ毫モ気色ヲ変ゼザルガ如キハ最モ君ノ如キ

人ニアラザレバ誰ガ泰然トシテ動カザルモノアランヤ。

君詢トニ西洋万巻ノ書ヲ腹中ニ蓄ヘ今ハ便々トシテ既ニ充満スルニヨリ他ニ望ミ求ムルノモノヲ欲セズ。無欲ニシテ只其分限ヲ知レリト云フテ世人ト競争シ社会ノ風上ニ立テ其芳臭ヲ争フノ念ナク三田ノ高台ニ棲居シ袖浦ニ浮ブ月影ノ清キヲ秋ノ長夜ニ之ヲ望ミ以テ人生無上ノ快楽トナス。然レドモ君近来大ニ教育改正ノ事ニ着目シ屢々演説壇上ニ顕ハレテ之ヲ講述スルノコトアリ。君教育ノ一事ヲ以テ世ニ報ユル所アラントス。嗚呼此益モ亦タ大ナリト謂ベシ。

始メ福沢君ト共に謀ルヤ其交リ最モ親密ナリト。而シテ福沢君ガ大名ヲ天下ニ博シ得タルモノハ蓋シ一大事業ヲ傑出セシモノアルニヨツテ然ルニアラズ。只其大名ヲ世上ニ博シタルモノハ彼ノ西籍翻訳ノ事ニ因テ之ヲ得タルナリ。而シテ其翻訳ノ事タル小幡君ノ如キ漢洋西籍ヲ渉猟セシ人ヲ得ルニアラザレバ恐ラクハ三田大先生ノ名ヲ今日ニ全フスルコトヲ得ザルベシ。君ハ豊前中津ノ人ニシテ福沢君ト同郷ナリト。実ニ此二君ガ我国ノ文明ヲ助ケシノ功実トニ多シ。

※大野泰雄『自由官権両党人物論』小幡篤次郎君　明治十五年三月

この小幡評は、本論文成稿後に竹田行之氏より教示頂いた。よって、本文に組み込むことを為し得ず、ここに掲載するに留まることになった。この小幡評の要点は、初期慶應義塾において塾生達の思想形成に小幡の与るところ大であったこと、福沢が「能ク計ル者ナリ」とされたのに対して、小幡が「能ク遂クル者ナリ」とされたことであろう。どちらも初期慶應義塾における小幡の存在の大きさを示すものと言える。

谷永日々ニ諫テ小人タリト。由是観之一事一物囂々之ヲ議シ政府ノ為ス所必ス是非ヲ容ル、者未タ悉ク憂国ノ士ト云フ可ラズ。黙シテ天下ノ大勢ヲ察シ冥々ノ裡世潮ヲ左右スル者信ノ名士ト称ス可キ也。今夫レ小幡君ノ政治界ニ於ル声モナク臭モナキ如シト雖モ倩々君カ業為ニ観察ヲ下サハ君ハ実ニ日々ニ諫メテ小人タル者ト異ニシテ即チ黙シテ世潮ヲ左右スルノ名士タリト云フベキカ。今日政治界ニ立チ是非ヲ論壇ニ試ムル人概ネ軽躁浮薄ニ失シ易ク甚キハ真ノ自由ヲ解スル能ハズ。只世朝ニ従テ囂々世事ヲ論シ自ラ称シテ憂国ノ士トナス者アリ。以是保守党ヲシテ尚ホ嘴ヲ鼓シテ自由党ニ攻撃ヲ試マシムルニ至ル。

是レ所謂ル日々ニ諫メテ小人タル者ナリ。小幡君之ニ異ナリ其外形ヲ見レハ超然政治界ヲ脱遁スル者ノ如クナリト雖モ今マ世上ニ顕ハレ自由ト云ヒ民権ト論スル者ハ多クハ君ノ思想顕レテ世ニ播ク者ナリ。只タ自ラ口ヲ開ヒテ論セズシテ人之ヲ受ケテ世ニ播クノ差アルノミ。

蓋シ今日論壇ニ立テ世事ヲ是非シ自由ヲ称シ民権ヲ唱フ者多クハ三田慶應義塾ノ人ナリ。而シテ慶應義塾ニ於テ此ノ人ヲ薫陶シ此ノ人ヲシテ此ノ思想ヲ抱カシメタル者ハ誰ソヤ。慶應義塾ハ福沢氏ノ塾ト云フト雖モ小幡君ノ力与テ小少ニ非サル也。君福沢氏ト郷ヲ同フシ早ク時世ヲ察シテ英書蘭学ヲ修メ長崎ニ東都ニ雪窓蛍案ノ業ヲ積ミ慶應ノ末福沢氏慶應義塾ヲ創ムルヤ君助ケテ諸書ヲ翻訳シ以テ今日盛大ノ種子ヲ下ス。福沢氏ハ能ク計ル者ナリ。猶ホ創業ノ臣ノコトシ。小幡氏ハ能ク遂クル者ナリ。猶ホ守成ノ臣ノコトシ。小幡君ニシテ無クハ慶應義塾ノ結果蓋シ今日ノ如キ美ヲ見ル能ハサル也。然レハ則チ今日政治界ニ立テ世事ヲ是非スル者多クハ小幡氏ノ薫陶ニ依ルモノナリ。小幡氏ノ薫陶此ノ功アレハ今日小幡氏ハ黙シテ言ハズト雖モ其世上ニ発表シテ自由ト云ヒ民権ト云フ者ハ即チ君ノ思想ノ発表スル者ナリ。之レ余カ君ヲ評シテ日々ニ諫テ小人タルモノト異ニシテ所謂ル黙シテ世潮ヲ左右スルノ名士ト云フ所以也。

人或ハ云ハン慶應義塾ヨリ出ツルノ人自由ヲ称シ民権ヲ唱フニ依テ即チ小幡氏ノ思想トナス何ソ大早計ノ甚キヤト。夫レ然リ。然レドモ義塾門下ノ人々ヲシテ此ノ思想ヲ抱カシムル者ハ慶應義塾ノ薫陶勢茲ニ至ルモノニシテ独リ義塾ヨリ出ツル人ノ多クシテ他ノ塾生ニ少ナキハ豈ニ義塾ノ薫陶此ノ思想ヲ抱カシムト云ハサルヲ得ンヤ。近者時事新報ノ発刊アリ。小幡氏筆ヲ之ニ把ルト聞ケハ小幡氏ノ評是ヨリ定マラン。惜カナ発刊日尚ホ浅ク之カ評ヲ下ス能ハサルヲ。

＊資料の記載にあたっては、文意を把握し易くするために句読点、段落分けを筆者が施した。